

ブルネイにおける日本語教育の歴史

—戦前を中心に—

(草稿)

斎藤正雄

1. はじめに (先行研究)
2. ブルネイ概観
3. 日本軍政下の日本語教育
 - 3-1 日本軍政下のボルネオ及びブルネイ
 - 3-2 北ボルネオにおける日本語教育の概要
 - 3-3 ブルネイでの日本語教育
 - 3-4 南方特別留学生
4. 異なる性格を有する軍政下での日本語教育 (他地域との比較)
5. ブルネイ人は日本の軍政をどう評価しているか
6. おわりに

(要旨)

ブルネイにおける日本語教育の歴史についてこれまで分かったことをまとめてみたいと思います。これまでに数は極めて小数ですが、北ボルネオやブルネイにおける日本語教育の歴史が研究されています。これまでの先行研究を顕彰するとともに、私が入手しえた情報を整理してみたいと思います。私は1999年から2002年にかけて3年半ブルネイに勤務いたしました。そのためブルネイやマレーシアにおいて少なからぬ人々直接お話しする機会がありました。また、日本にいてはなかなか目にする事のないような資料や文献に触れることもありました。そして、かつて日本占領下のブルネイの地に組織的な日本語教育が存在したということを知り驚きました。

多くの方々にご教示をいただき、最近おぼろげながらですが、その輪郭が見えてところで。今回その一端なりともお伝えできれば幸いです。

今後も調査を続けて行きたいと考えておりますので、ご支援をお願い致します。

(キーワード: 北ボルネオ、ブルネイ、官吏養成所、南方特別留学生、日本軍政)

1. はじめに (先行研究)

これまでの先行研究や、私が知りえた情報をお知らせ致します。

(1) 松永典子先生:『日本軍政下(1941年～1945年の北ボルネオにおける教育施策—1942年、1943年「北ボルネオ軍政概要」を中心として』(言語教育センター『ポリグロシア』(第7巻)2003年3月31日発行 抜粋)

この論文により北ボルネオにおけるブルネイの位置づけがみえてきました。また、本稿もこの論文の上に成り立っているものです。

(2) 齋藤正雄:『ブルネイ日本語教育小史』(2001年・「第2回 ブルネイ日本研究・日本語教育シンポジウム 報告書」)

これは私(齋藤)が2001年にブルネイの有志によって開催された小規模な集まりの際に発表した原稿です。恐らく日本にはそのコピーもないことであろうし、入手も不可能なので、本資料の巻末に参考として掲載させていただきます。

(3) 社団法人ブルネイ日本友好協会(編)『ブルネイの戦中誌』 1995年
ブルネイの日本語教育には直接触れてはいませんが、周辺の状況がよく分かります。

(4) SECONDARY HISTORY FOR BRUNEI DARUSSALAM

ブルネイの中等教育歴史教科書です。日本でいうと中学校の歴史の教科書に相当します。この本の中では、1941年から45年までが「日本占領時代」としてまるまる一章が当てられています。その記述はこの教科書全体の8%近くに及びます。1941—45年とはブルネイにとってまさに日本に占領された時代であったのであり、第2次世界大戦イコール日本による占領でした。

(筆者注:日本の歴史教科書を調べてみましたが、どの教科書にもブルネイの名前は出てきませんでした。)

(5) 澤田紘「ゆうゆう王国—ブルネイの歴史—」ブルネイ日本人会会報『ダルサラーム』2000年1月～8月号に連載

地元の日本人会会報に掲載されたものです。日本語教育への言及はありませんが、地元で長くお住まいの邦人が書かれたものなので、極めて貴重な資料かと思えます。

「南方特別留学生」に関するもの

(以下(6)～(9)は松永先生からご教示をいただいたもの)

(6) 江上芳郎『南方特別留学生招聘事業の研究』龍溪書舎、1997

(7) 上遠野寛子『東南アジアの弟たち』三交社、1985

- (8) 倉沢愛子編『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』草思社、1997
- (9) レオカディオ・レアシス『南方特別留学生トウキョウ日記』秀英書房、1982
- (10) 「太陽が落ちてきた日ー南方特別留学生と原始爆弾彼弾ー」(ニュースレター)
残念ながら出版社、出版年月日、編者等詳細が分かりません。ご存知の方はご教示ください。
この中にはユソフ氏が昭和20年当時書いた色紙が掲載されています。
- (11) 倉沢愛子『「大東亜」戦争を知っていますか』2002年、
講談社現代新書(1617)
- (12) 『明治大学百年史』 明治大学百年史編纂委員会 昭和61年(1986年)
- (13) 日本占領下で日本語教育を受けた方への聞き取り調査の結果
(2004年11月6日、ブルネイにて)
これは聞き取り調査の結果を文字化したものです。本稿の後に資料として添付してあります。

このほかにも沢山あると思いますので、ご教示をいただけましたら幸いです。

2. ブルネイ概観

ブルネイといいましても、ほとんどの方がその位置さえご存じないと思いますので、以下日本語教育とは直接の関係はありませんが、ブルネイについて説明致します。

ブルネイはボルネオ島の一角に位置しており、その面積は5,765平方キロメートルで、日本の三重県と同じ広さです。人口は約35万人といわれていますが、これはブルネイ国籍以外の人も含めての数字で、ブルネイ国籍を有する方は20万人程度です。気候は典型的な熱帯雨林気候で、一年を通じて気温は28度から33度前後です。乾季、雨季はありますが一年を通じて気候の変化はほとんどありません。今でこそ衛生的な町ですが、ほんの20年前まではマラリアを初めとする風土病に苦しめられていたようです。

経済の面で日本とブルネイは深い結びつきがあります。ブルネイから日本へは石油や液化天然ガスが輸出されており、その額はブルネイの輸出総額の40%に相当します。また、日本からは機械製品などを輸入しており、その額は輸入総額の7%に当たります。60数年前、石油を求めてブルネイにやってきた日本でしたが、石油を媒介とした付き合いは今も続いています。

言語はマレー語が公用語の位置を占めていますが、英語が広く通じます。しかし、第2次

世界大戦前、ブルネイには英語で教える学校はなく、英語の学校ができたのは戦争後、それも1953年になってのことでした。中国語は「普通語」(いわゆる北京官話というもので中国語の共通語とされる言葉)が広く使われている他、台湾出身者が多いため「閩南語(福建語)」が、それに「広東語」が話されています。

ブルネイを象徴する言葉に「三大国是」というものがあり、「マレー主義」、「イスラム国家」、「王制主義」がそれです。この3つはブルネイを考える時、見逃せない点です。

3. 日本軍政下の日本語教育

3-1、日本軍政下のボルネオ及びブルネイ

この時期の時代背景ですが、1930年代中国大陸での抵日運動が激化し、いわゆる15年戦争と言われるような長期戦になりました。こうした情勢の打開策として考えられたのが「南方進出」です。これはアメリカ、イギリス、オランダなどからの対日石油輸出禁止制限に対抗するための方策で、こうした考え方は、時の「大東亜共圏」というスローガンのもと日本の南方侵略を合理化する言葉になって行きます。そして、1941年太平洋戦争が始まると同時に、日本は東南アジアへ武力進出し、フィリピン、シンガポール、ビルマ、インドネシアを次々と占領、軍政を施行して日本語教育を実施していきます。

そして、北ボルネオ、そしてブルネイも日本軍に約3年半に渡って占領されることとなります。それに付随して以下考察する日本語教育も始まるわけです。

さて、私(斎藤)は拙著『ブルネイ日本語教育小史』で、「日本軍政下で行われた日本語教育では現在とは異なるもので、日本の民族的な優越感や大国主義が前面に押し出されたものでした。日本は大東亜共栄圏の共通語、東亜語としての日本語を掲げましたが、その裏には欧米列強との対抗意識がありました。また、「日本精神としての日本語」という点が盛んに強調されていますが、翻って考えれば、それは日本の優越感の現れであり、他民族を低く見、自らを高い所におくということにほかなりませんでした。そして、その教育現場では「皇国教育を中核として、日本語教育並びに精神教育を徹底」「偏知教育を排して技能教育を拡充強化」という目標が掲げられたのですが、つまりは「日本語・日本文化・日本精神の押し付け、技能教育を施し、日本語で操り、現地の人々を戦争遂行に奉仕させる。」という側面があったことを、私達は忘れてはいけないと思います。日本占領下のブルネイにおいても、こうした延長上に多くの事柄が進められたのではないかと想像されます。」と述べましたが、基本的には今でもこの通りだと思っております。

しかし、フィリピン、シンガポール、ビルマ、インドネシア、香港等その地域、その地域によってかなり歴史的、地理的な理由からその日本語教育の内容にはかなりの違いがあったことがわかります。

今回、この点について若干触れますが、今後もう少し深く考えていくべき重要な課点かと

思われます。

以下、日本語教育の前提となる日本軍の施策を北ボルネオ全体、ミリ州、ブルネイの順で軍政の概要を見ていき、次に聞き取り調査の結果を中心に当時の日本語教育の様子を考えたいと思います。

ところで、こうした作業をする前に留意しておかなければならないのが現代人の地理感覚です。現在ブルネイは独立国であり、マレーシアとの国境は明確です。しかし日本占領下では、ブルネイはミリ州の一部でしかありませんでした。現在の私達はブルネイという「国」があり、そして、そこには国の中心である首都バンダル・スリ・ブガワン(ブルネイタウン)があるという視点がまず先にきて、この町を中心に放射線状に四方を見回すような発想しかとれません。以前はミリやブライト地方の間には国境もなかったし北ボルネオの一部分、いや、もっと言ってしまえばミリ州の一県という認識でしかありませんでした。それは当時の地図を見ても明らかです。ですから、私達は現在のブルネイという「国名」にあまりにも重きをおいてしまうとその実態を見誤ってしまうことになります。

占領開始時期の状況ですが、時間的な流れは次のようなものです。

- 1941年12月16日未明ミリに上陸、セリア、ミリを制圧。
- 1941年12月22日、ブルネイタウン占領
- 1941年12月31日、ブルネイ全土占領
- 1942年1月24日、サラワク、サバを含む北ボルネオ全域を占領
- 1942年4月1日、ボルネオ守備軍、二千人の人員で発足。

また、占領下のブルネイでは軍司令官に前田利為が当たっていましたが、ブルネイ側から近親感を持たれたようです。また日本軍が派遣した州長官、県知事も、イスラムを尊重し、争いの起こらないように心がけ、ある程度民意をつかんでいたようです。

こうした中で、ミリ油田からムアラ(ブルネイの地名)まで油送管を敷設する、セリア、ブルネイタウン、ムアラを結ぶ自動車道を建設する、ラブアン島に飛行場を建設する等の大きな計画が生まれ実施されます。こうした軍政並びに大工事を実施するにあたって軍側と現地の人々との間に一定のコミュニケーションが必要であったことが想像され、そのためにも日本語の普及は必要でした。

こうした時期の日本軍のブルネイ支配の様子についてブルネイの歴史教科書は次のようにのべています。

「ブルネイでは、日本軍は破壊を免れた政府の建物を統治のためのセンターとして活用した。日本軍統治の初期にはその統治機構にわずかな変化があった。地元の間人(人間)や英国の役人達は引き続き働いていたが、それはもちろん日本軍の命令のもとにであった。」

「日本軍政下におけるブルネイでは、Sultan Ahmad Tajuddin はその恩給を停止させられた。日本軍総督により新しい統治が行なわれた。」

このように軍政はそのまま完全な日本式のシステムに移行を意味しました。

しかしながら、日本の施政について次のように批判しています

「地元の人々は以前と同じように働いていった。日本軍は人々の心や思いを日本の方へ引きつけようと努力していた。なぜなら土地の人々は日本に対して強い憤りを持っていたからである。特に、地元の間人は日本軍の兵士に会ったとき、おじぎをさせられていた。この日本の習慣の強制はひどいものであったし、占領以前からその土地に住んでいた日本人の役人から強制されることは耐えられないものであった。」

「日本軍がブルネイを占領していた時代、日本軍はより優れた統治制度やブルネイのインフラ再建には興味を示さなかった。日本軍の怠慢な政策により、食料、衣料品が次第に不足していくなど、広い範囲における困難が引き起こされた。」

占領軍という性格上、日本が「石油を初めとする資源の収奪、現地での食料、日用品の調達、現地の人々への強制的な戦争協力」を行ったことは間違いはなく、その結果として、ブルネイ側は日本のやり方に不満を持ちましたし、実生活でも困難に直面していたのです。こうした背景を理解した上でないと日本語教育の本質は理解できないと思います。

4-2、北ボルネオにおける日本語教育の概要

松永先生(上記論文)よれば、日本占領下の北ボルネオの日本語教育の概要は次のように述べられています。

1. 教育施設、教育体系、教育内容のいずれをとっても戦前の程度を超えるものとは言えず、マラヤと比較してみても教育施設に見るべきものはなかった。
2. 全体的には1943年12月には学校の再開率が6割にまで回復したと総括されているが、ミリ州のように児童の復学率が入学適齢児童の13分の1に過ぎないという州もあり、全体的に見て教育の普及範囲が小学校や日本語講習所、日本語学校という狭い範囲に限られていた。
3. 他の占領地同様、学習者の多様化は見られる一方、教科書、教材類が現地で編纂された形跡は確認できない。

すなわち、北ボルネオでは初等教育を中心とする普通教育は極めて低調に終わった。また、日本語講習所や日本語学校で行われていた一般教育のほうも、速成講習や短期「練成」により、必要最小限の軍事協力要員を養成するにとどまったと見られる。連合軍の攻撃に対する防衛に力をいれなければならなかった北ボルネオでは、軍政機構が十分に機能できるほど整っておらず、教育施設に投じられる人員がもともと限られていたのである。」

上記の点はブルネイにおいても共通する点が多くあり、関係者の証言もそれを裏付けています。軍政下のマラヤ、シンガポール、それに香港などの他地域と比べても教育内容は見劣りするものでした。日本軍としては石油を中心とする資源の確保、そして戦争継続のための

人的資源の獲得が問題であり、そもそも教育そのものに力を入れるという発想がなかったのだと思います。また、あつたにしても北ボルネオのブルネイの地まで人的、物的な支援をする余裕はなかったものと思われます。ひいては日本語教育も形式的に施策はあるものの実態としては極めて貧弱なものだったのだろうと考えられます。

4-3、ブルネイでの日本語教育

4-3-1 概要

ブルネイにおける日本語教育の歴史ですが、恐らく日本軍がやって来る前には、個人教授や独学という形はあったかも知れませんが、日本語教育が組織的に行われたことはありませんでした。

ですから、ブルネイの日本語教育とは、第二次世界大戦の勃発により日本軍が入ってくることにより突如として始まり、日本の敗戦によりまた突如なくなった。そして、それから30年後の1970年代に石油を仲介に再度始まり、1980年代後半には組織的な日本語教育が行われ今日に至っているというのが実際のところかと思えます。

戦前、ブルネイとサバ、サラワクをはじめ各地の日本語教育機関、教師の連絡、連携はあったようですが、初めにも述べましたが、基本的には「ブルネイの日本語教育」と考えるよりも「北ボルネオの一角のブルネイ」あるいは「ミリ州のブルネイ県」の日本語教育と位置づけた方が実態を正確に把握できるのではないかと思います。

4-3-2 ブルネイの歴史教科書の記述

ブルネイの歴史教科書では、軍政下の政策や日本語教育について次のように述べられています。

「日本は土地の人々を日本の文化、言語、イデオロギーに適応させるよう最大限の努力を払ったが、これは「NIPPONISATION」と呼ばれている。日本語は公用語となり、政府の学校の教育を通じて紹介されていった。日本は統治を人々の間に推し進めた。特に社会的、文化的な生活様式の面では日本的なやり方を広めようとさかんに努力をした。

日本は日本文化を熱心に広めようとした。しかしながらブルネイにおいてはうまくいかなかった。それというのも日本側のやり方に深い憎しみを感じていたからである。」

こうした日本式の押し付けの様子はブルネイだけでなく各地で数多く指摘されています。「日の丸」「君が代」日本の行事や皇国史観、また日本人からの蔑視などは耐え切れないものでした。日本語教育の背景をなすものとして、こうしたことも念頭に置く必要があるかと思えます。

(筆者注1:入江曜子『日本が「神の国」だった時代』(岩波新書、2001年は国民学校の教科書の分析を通じて当時の日本人の意識を分析していて興味深い。日本語教育の根底にある当時の日本人の意識構造を理解する必要があると思われる。)

さて、日本語教育については具体的に次のような記述が見られます。

「教育の分野では、日本はその短い期間に日本語を地元をめざましい勢いで普及させていた。ブルネイの町では約30人の教師が3か月にわたり訓練されていた。こうした教師の中には次のような人がいた。Marsal bin Waun, Jamil bin Umar, BasirbinTaha, Tuah bin Hitam, Haji Idris bin Hamzah. こうした地元の教師のほかにも Terusan, Limbang, Miri からの教師もいた。

学校における日本語教育は日本語の歌を使って教えることで学生の負担は軽くなった。日本語を学ぶことは全ての政府職員に強制されていたので、夜間の学校でまなんだ。その際、日本軍職員が指導に当たった。」

記述からは「日本語教師養成」「地域の教師の連携」といった様子。さらには「半ば強制的な日本語学習」「貧弱な教師、教授法(教材)」という様子が分かります。

日本側の記録では、昭和17年ボルネオ守備隊作成による「ミリ州ブルネイ県軍政概況」に、日本語普及に関する次のような記述が見られます。「日本語普及に付きては、ミリ市、ブルネイ市は、学校に正科として実施せしむる他、一般に日本の唱歌、体操等の授業を行いつつある。」記録の上では「正科」として学校で教えられています。上述の教師はこうした学校でブルネイ人師弟に教えるために訓練されたものと思われる。

つまりシステム的にはネイティブで専ある程度専門的な教授技術をもった教師及びネイティブスピーカー(日本軍職員)がブルネイ人を日本語教師として養成する。そのにわか仕込みのブルネイ人教師がブルネイ人師弟に教えるというもので、システム的には合理的かも知れませんが、教師も教材もなかった時代でもあり、その成果はあまり期待できるものではなかったようです。

1941年当時ブルネイの人口は約4万人、そのうちマレー系住民が3万人という記録があります。その数字から見れば30人の教師、さらに近隣地域からの教師を養成するのは大変なことだったと思います。このように一応組織だった動きのようですが、その教育内容となるとかなり不備なものだったことについては当時の日本語教育を体験された方の証言にもありますので、次章で詳しく見ることにします。

(筆者注2:上述の「ミリ州ブルネイ県軍政概況」当時の学校の数や学生数を次のように伝えています。

「学校はマレー学校28校、華僑学校7校、その他3校、計38校で生徒数は2574人(この数字は教育適齢児童の13分の1である)」

この数字を単純にあてはめれば、当時は約2500名の学生に対して30名程度の教師がいたことになり、その割合としては、教師1名あたり学生80名という計算になります。

一方、ブルネイ博物館に残る資料によれば、「1941年当時の人口は約4万人で内マレー人が3万、中国人とインド人、その他があわせて1万人程度であった。学生数も1746名であり、内女学生が312人いた。」との記録がありますが、それにしても教師1名あたり学生60名程度の数字になります。

また、当時修学適齢期の児童の圧倒的多数は学校に通うことはできなかったのですが、証言からは学校を再開し学校の中で日本語を学ばせるというよりも、日本軍が接收した施設を学校、あるいはキャンプとして活用して、そこで日本語を教えたり技術教育をしたり、勤労奉仕をさせたりする姿が垣間見られます。しかし、こうした形態でどれくらいの人が日本語を学んだのか、それは把握困難です。

ブルネイの教科書は日本語教育の成果について次のような評価を下しています。

「日本の統治・教育は都市部ではうまくいったが、都市からはなれた田舎では教師の不足もありうまくいかなかった。しかし、3年間の日本占領時代に多くの地元住民は日本語を理解したり話すようになった。それは日本語の集中的なプログラムがあったからである。」

今となっては「日本語の集中的なプログラム」の内容を窺い知るよしもありますが、「3年間の日本占領時代に多くの地元住民は日本語を理解したり話すようになった。」と明らかに肯定的なコメントを述べおり、他の日本軍政を経験した地域と比べると実に穏やかな見解、コメントであり、かえって印象的です。

4-3-3 聞き取り調査から (1) ジャミル氏の場合

以上、これまでに文献からブルネイの日本語教育を概観したわけですが、幸い私はブルネイで実際に日本語教育を受けた方の声に接することができましたので、次に聞き取り調査で知りえた内容を述べたいと思います。2001年にジャミル氏、2004年にモクシン氏から直接お話を聞くことができましたので、ここにまとめてみます。

Pehin Orang Kaya Amar Diraja Dato Seri Utama (Dr) Haji Awang Muhammad Jamil Al-Sufri 氏。(以下、ジャミル氏と省略)。お生まれは1921年12月10日。

ジャミル氏の日本語学習歴は次の通りです。

1939年から1941年までマレーシアの Suitan Idris 師範学校に通っていました。今ですと国境を越えての留学ですが、当時はそんな意識はあまりなかったようです。ところが、第2次世界大戦の勃発によりブルネイへの帰国が難しくなりました。そこで、すぐには帰国せずシンガポールへ行って、6か月間日本語を学びました。

1942年にはブルネイに戻りその後2年間日本語を学びながらブルネイで活躍されました。終戦が間近になった1944年から45年にかけてクチン(マレーシア)の日本軍政府の官吏養成所で6か月間日本語を学びました。そして、終戦を迎えられました。

残念なことに、どんな動機で、シンガポールのどのような機関で、どのように学んだかを伺うことはできませんでしたが、占領下のシンガポールで日本語の勉強を始めています。

1942年にブルネイに戻り、日本語教育を受けたが、その施設はブルネイタウン(現在のバンドル・スリ・ブガワン)のJalan Sultanにあった。現在の「香港上海銀行」の隣にあったビルであり、そこには大勢の人が集まり勉強をしたとのこと。

(筆者注3:この学校があった地点は、次のモクシン氏の証言と全く一致します。また、モクシン氏はこのジャミル氏と一緒にの時代に勉強しており、お互いに面識はあるとのこと。また、証言をいただいた地点はブルネイの首都バンドル・スリ・ブガワンの主要な通りである「Jalan Sultan」と「Jalan Pemancha」の交差点からわずかの地点です。現在「香港上海銀行」として使用されているビルがありますが、そのビルの隣です。筆者は実際に足を運んでみましたが、町の中心地で、交通も便利であり、運河もあり、当時としては最も便利な地点であったことを確認しました。)

日本語教育の内容については、専門的な日本語の教師は1名だけであり、ほかには日本軍職員が教えた。そのため体系的な教え方も教授法も不十分であった。日本語教育の内容も「日々の片言の日常会話、日本の歌、体操の際の掛け声」程度レベルであり、仮にもっと勉強したいと思っても教材も教具もほとんどなかったとのこと。

(筆者注4:松永『日本軍政下(1941年~1945年の北ボルネオにおける教育施策—1942年、1943年「北ボルネオ軍政概要」を中心として』にも、

「教育要員として本来の任務をまっとうできなかったという点について森泰三氏は次のように述懐されている。1943年12月、灘集団司令部に軍政要員として配属されたが、「日本語教育要員としての講習は受けても、現地では人員不足のため他の必要な部署の仕事に廻され、本来の仕事はできなかった。特に司令部では日本語教育というよりも教育管理という仕事为主であった。戦況が悪化すると、軍政より戦闘態勢を整えることの方が大切であった。」

との証言がある。まさに教育どころではなかったのであろう。)

(筆者注5:ブルネイの歴史教科書の中にも次のような記述が見えます。

「学校における日本語教育は日本語の歌を使って教えることで学生の負担は軽くなった。日本語を学ぶことは全ての政府職員に強制されていたので、夜間の学校でまなんだ。その際、日本軍職員が指導に当たった。」とあり、一定の訓練を受けた教師はほとんどいなかったようです。)

その後、ジャミル氏はブルネイで日本語の教師として訓練を受け活躍されます。上述の「教育の分野では、日本はその短い期間に日本語を地元をめざましい勢いで普及させていた。ブルネイの町では約30人の教師が3か月にわたり訓練されていた。こうした教師の中にはMarsal bin Waun, Jamil bin Umar, Basir bin Taha, Tuah bin Hitam, Haji Idris bin Hamzahのような人がいた。こうした地元の教師のほかにTerusan, Limbang, Miriからの教師もいた。」という一節の、Jamil bin Umar氏こそはジャミル氏ご本人であり、ここの登場する人物はジャミル氏の同世代の人でともに戦争の時代を生き抜いた人です。当時の状況はこの記述にあるように地域間の連絡は密でありある種の活気にあふれていたようです。

ジャミル氏は「当時、みなそれぞれに若く、ブルネイで日本語を学んだ。せつかく学んだがその後実際に使う機会はほとんど無かった」のは実に残念なことだと当時を回顧しています。日本軍の施策で賞賛すべきものはないのであるが、外部からの新しい考え、思想に触れるとともに本来なら触れることもないであろう分野の勉強をする機会を得た。さらに仲間と語り合い、行動する中で自らの思想を形成していった時期だったという主旨のことを述べています。

終戦も間近になった1944年から45年にかけてクチン(マレーシア)の日本軍政府の官吏養成所にて6か月間日本語を学んだとのことですが、その内容については詳しく伺えませんでしたが、しかし、松永(上記論文)によれば、「日本語普及の教員難を切り抜けるために1942年8月クチン市にクチン日本語講習所を設置し、初等科、中等科、高等科の3段階を設け、各科6か月とし、生徒300名を収容している。教職員は嘱託3名、兵4名をもって開所した。クチンにはこの他に前述の「北ボルネオ現地住民官吏養成所」があった。ここでは毎朝のラジオ体操を皮切りに宮場遥拝、君が代斉唱などが行われた。教育内容としては、日本語の会話学習が中心で、他に文法、ドリル、音楽、日本歴史の授業があった。授業は日本語だけで行われ、平仮名とカタカナだけが教授された。」とあり、ジャミル氏も恐らくこうしたプログラムで勉強されたのであろうと想像されます。

ジャミル氏の場合、マレーシア、シンガポール、ブルネイで学ぶことができ、当時としては比較的恵まれた方でした。そして、戦争が終わった後もブルネイ政府や教育現場で活躍され、ブルネイの歴史センターの要職を果たされました。

4-3-4 聞き取り調査から(2)モクシン氏の場合

(筆者注6:1.「はじめに」にも書きましたが、モクシン氏へのインタビューの詳細を「メモ」として別添致しましたので、詳細はそちらをご覧ください。)

Haji Moksin Chu Chu氏。(以後「モクシン」氏と表記する。)はカンポン・プムラ(現在のブルネイのブルネイ・ムアラ行政地区内)のご出身で、1910年前後のお生まれ。日本軍がブルネイに入ってきた1941年当時、は30歳前後だったということになります。

モクシン氏は当時の日本語教育に関して次のように述べています。

開戦当時、ブルネイには日本人も日本の会社もほとんどなく、テンブロン地区にやしの実を扱う会社があったくらいであった。当然、モクシン氏もこれまで日本人との付き合いはなかった。

しかし、第2次世界大戦が始まり日本軍がブルネイに入ってくると同時に、人々は一か所

に集められ、学校というよりもキャンプのような感じで、勉強と勤労奉仕の日が始まった。学校のあった場所は、現在のバンドルの中心地、ジャラン・スルタンの地点で、現在の香港上海銀行のある地点でした。ここはブルネイタウン(つまり現在の「バンドル スリ ブガワン」)の中心地であり、「カンポン アイル」(水上集落)から歩いてでも通うことができました。現在のカンポン アイルと違い大勢の人がいた。

(筆者注7:学校の所在地は、上記ジャミル氏の発言と全く一致しており、いずれも「ジャラン スルタン」、現在の香港上海銀行の隣のビルである。

なぜ、日本語を勉強し始めたのか、その動機はなんといっても、戦争の時代で日本語を知っていることは職を得るためという実利的な面と同時に、なにより保身のためであった。こうした「保身」という動機はモクシン氏だけでなく、またボルネオだけでなく、日本の占領地においては広く見られたことでした。

当時の日本語教育の内容だが、「教育」と言っても軍人が教えるだけのもので、体系的な勉強はできなかった。具体的には日本の唱歌、挨拶、掛け声、号令、数字、本当に基本的な言い回しを教わったくらいだ。教材も皆無に等しくテキストが配られることもなかった。何冊かあるテキストをみんなでノートに書き写し利用した。そのノート等も学校において家で何か勉強するというものもないようなレベルの低いものだった。

教師は教えようにも訓練を積んだ教師ではないので、うまく教えることはできなかった。学習者側も、勉強したいといっても辞書さえもない状況で、だれか日本語ができるものが、単語や言い回しを日本人から聞いて覚え、それを他の者にマレー語で説明するくらいしかできなかった。

(筆者注8:松永典子先生:『日本軍政下(1941年~1945年の北ボルネオにおける教育施策—1942年、1943年「北ボルネオ軍政概要」を中心として』によれば、

「前述のユソフ氏によれば、教科書はなく、漢字を習ったのは日本へ留学してからだという。教員は森寛三、藤田幸作(陸軍曹長、ドリル、体操を担当)武田(軍人、文法、ディシプリン担当。マレー語が少しできた)など、4、5名であった。この当時、日本語の新聞に触れる機会はなく、ラジオ放送はラウドスピーカーによるものだったという。」

しっかりした官吏養成所でもこの程度であったのであり、ブルネイのような地域ではその内容も見劣りするものであったろうことは容易に想像がつかます。

(筆者注9:ジャミル氏にも同様の証言がある。

「日本人の中で教えるための訓練を受けたことがあり、きちんと日本語を教えられる教師は1名だけだった。タカガワ・ジュンイチロウという名前の教師であった。その他は日本軍の兵士が教師役をしていたに過ぎない。当然のことながら日本人であるというだけではうまく教えることはできなかった。教材といってもこれといったものはなく、ただ、日々の片言の

日常会話、日本の歌、体操の際の掛け声程度のものであった。仮にもっと勉強したいと思っても教材も教具もほとんどない状態だった。」(『小史』)

学校で学んだものは日本語の他に、刺繍、絵つけ、彫刻等の技術を学んだ。しかし、その後学んだ技術を使う機会はなかった。しかし、これまでにそうした学ぶ場を持ったことがなかったのも、非常に興味深くそれを学んだ。

学校での様子だが、そこは午前と午後に分かれて授業が行われた。大体、午前500人程度、午後500人程度、合計で一日に千人前後の若者が学んでいた。ここで学んだ人たちはほとんどカンボン・アイル(水上集落)に住んでいた若者だった。

(筆者注10:カンボン・アイルというのはブルネイの川の上に作られている水上集落です。今でこそ、このカンボン・アイルに住む人は少数グループであるが、当時はブルネイタウンといっても、このカンボン・アイルこそが町の中心で、逆に陸上の家屋の方が少数でした。もっと言ってしまえば、当時のブルネイ(ブルネイタウン)の実態はこのカンボン・アイルと陸上のおおよそ500メートル四方の繁華街程度のものであったと考えられます。

『日本ニュース映画史一別冊1億人の昭和史一』(毎日新聞)1977のP177に何枚かの記録写真があるが、この写真から判断しても、町の規模はそれほど大きくないことが分かります。)

また、日本軍と地元民のコミュニケーション、更には日本人通訳とスパイ活動について次のようにも述べています。

軍内部(部隊)での日本人と地元の間とのコミュニケーションだが、日本人の側に通訳がいて、その通訳がほとんどのことを伝えたので、それほど困らなかった。

こうした通訳は同時にスパイ活動も行っていた。既に戦争の前から6人の日本人がその身分を隠して、地元に入り込んでいた。この6人のうち4人はマレー語ができ、イスラム教徒に混じって「コーラン」も読めた。2人は中国語ができた。いずれにしても、こうした人々が通訳していたので、実際のコミュニケーションはさほど困らなかった。

以上、ジャミル氏、モクシン氏の証言を総合してみると、ブルネイでの日本語教育の様子は意外と貧弱なものであったのではないかと思います。また、教育の現場も学校というよりも「キャンプ」と表現した方が適切かもしれないものでした。

モクシン氏は日本軍によってその人生が変わってしまったと回顧されています。生活のため、保身のため日本語を学び、日本軍とともに行動し、その敗戦によりすべてが終る。日本軍が去った後も、日本軍のために働いた人間としてあまり好ましくない印象を残してしまったようですし、その後も日本語を生かす仕事を得られることもなく生きて来られたようです。それでもなお本来なら得られなかったであろう「学ぶ場」を得たこと、さらに友達や新たな考え方を獲得したことは有意義だった、楽しかったと回顧されています。

3-4 南方特別留学生

「南方特別留学生」として1943年と1944年の2回、合計203名が日本に向かいました。その内訳はインドネシア81名、マラヤ12名、ビルマ47名、フィリピン51名、タイ12名で、北ボルネオから日本に向かったのはわずか2名でした。他地域と比較した場合、200名中の2名というのは北ボルネオの当時の重要性をいみじくも物語っているように思えます。

日本で初めての国費留学生であり、国際学友会(当時中目黒にあった)で1年間日本語を学んだ後、勉学の後志望校にあわせて全国の大学に割り当てられました。しかし、希望する学校に進めない、学習内容が国体やイデオロギーに偏りすぎているといった留学生の不満も多かったようです。また、日本人からの蔑視に耐え切れない思いをした人もいたようです。

(筆者注11: 学生を受け入れた国際学友会はその「趣旨」について、次のようにうたっている。

「南方処諸地域ヨリ有為ナル人物ヲ簡拔シ、我国ニ留学セシメ、可能ナル限り短期間ニ、我が学芸オヨビ実務ヲ習得セシムルトモニ、我が国民性ノ真髓ニ触レシメ、以ッテ帰国後ハ原住民ヲ率イ、大東亜共栄圏建設ニ協力邁進スベキ人材を育成スルモノトスル。」)

(筆者注12: 倉沢愛子『「大東亜」戦争を知っていますか』にも

学生はビルマ(「孔雀寮」(神田猿楽町)、ジャワ(「南洋協会」(1915年に作られた民間団体、目黒区中目黒)インドネシア海軍地区の学生(振興亜会の「大東亜寮」(豊島区高田本町)フィリピン警察(「比島学生寮」(淀橋区東大久保)、マラヤ、スマトラ、フィリピンの一般学生「国際学友会寮」(目黒区碑文谷町)といった学生寮に住まわされ、日本人との接触は難しい、監視されたような生活を送っていた様子が記されている。

ブルネイからも王族の一員 Pengiran Mohammad Yussof 氏(以下、ユソフ氏と省略)も南方特別留学生として日本へ向かいました。当時ブルネイから日本へ行った唯一の留学生です。ユソフ氏は1944年に日本へ行った101名の中の一人で、1945年3月まで東京で勉強し、4月より広島文理大学へ行きました。大学で教育学を専攻中、8月6日原子爆弾に遭遇してしまいました。

(筆者注13: ブルネイの歴史教科書にも次のような記述が見えます。

「日本の影響力を強化し、反ヨーロッパ感情を広げるために、日本は若者の交換プログラムを作った。それらのプログラムは直ちに日本の文化を広めた。このプログラムで、Sheikh Azahari はインドネシアへ、Pengiran Mohammad Yussof は日本へ、Jamil Umar, HB Hidup, Yaffendi はサラワクのミリの軍事センターへ行った。」

ユソフ氏はこうした試練を経て、その後ブルネイと日本の平和友好のため貢献され、在日

本ブルネイ大使も勤められたこともあります。

ジャミル氏、モクシン氏、ユソフ氏、それぞれの生い立ち、社会的なステイタス、日本語を学んだ後の進路は違っていますが、皆一様にブルネイの方々の占領下における日本語教育に対して肯定的な評価を与えている点に注目しなければならないと思います。ユソフ氏も「ユソフ氏は1944年6月に来日し、国際学友会日本語学校における9か月ほどの準備教育を経た後、1945年4月から広島文理大学教育学部に入学をはたした。その後被爆されるという不運な経験をされている。それにも関わらず、彼は日本語を勉強し、日本に留学できたことをラッキーだったという、日本人の習慣・文化を学ぶことができたことは自分にとってハッピーなできごとであったというのである。」(松永)と述べています。当時の日本の施策、教育内容が肯定できるものとは決して思えないにもかかわらず、なぜ肯定的なものとして受け止められているのでしょうか。

私は今回の聞き取りから次のような意識が当時の若者にあっただのではないかと感じました。それは、まず、本来なら経済的、あるいは身分的な理由で受けられなかったであろう教育を受けることができたという点。次に、平和ではあるが閉鎖的な田舎社会に生まれ育った者として、若き日に外界の異なる人々や考え方に触れ、苦しい生活ながら同時代の仲間とともに思想の形成ができたという喜びを持たない点ではないだろうかと思えます。

実は、こうした点はブルネイでの日本語学習者のみならず、「このような日本の教育に対する肯定的評価は「南方特別留学生」に共通して見られる点」(松永)であったようです。

(筆者注14:戦前の教育、日本語教育というすべて否定的に扱われがちですが、いろいろな方に伺ったり、記録を読んでもみると、現在と比べると戦前の方が、何か人間的な教育が存在していたようで、それが留学生のみならず日本語学習者の心の琴線に触れたようです。ひるがえって現在の日本は経済的にもはるかに豊かになり、物質的に恵まれているにもかかわらず、教育の中の何か肝心な点が欠如してしまっているようです。特に日本へあこがれをもってやって来た留学生にとっては大変なショックのようです。)

4. 他地域と比較した軍政下での日本語教育の性格の相違

これまで、ブルネイにおける軍政下の日本語教育の様子を考えてきましたが、同じ軍政下での日本語教育といっても香港やシンガポールなどと比べるとその性格はかなり違っていたようです。

なぜ違っていたか?

交流の歴史の違い:特に中国・韓国とそれ以外の地域→現在も変わらぬ図式
それまで積み重ねられた歴史の問題

勉強したいと思ってもそれまでの蓄積がないということは、教科書、辞書さえもないところからの出発になる。

文化の相違 (近いと文化圏と感ぜられる)

意識の相違 (教える側・学ぶ側に意識)

占領下では占領される側もしたたかな意識を持っていたのでは。逆境をいかに生きるか。保身、風見鶏。一方で学ぶことの意義を感じていた。学ぼう、利用しようという意識があるから民間の学校さえ存在した。

現実的、物質的な問題：施設、教師（教授技術）、受講者の意識と教育レベル、教材、

そこから生じる日本語教育の性格の相違

本稿ではこうした事柄に踏み込む紙面も、また、筆者自身の力量もないのですが、今後こうした方面の研究をする方が、互いに連絡を取り合う必要があると思います。

また、こうしか過去の事象はその時終ったことではなく、その後の、戦後の日本語教育にそのまま引き継がれ、現在においても同じような問題をひきずっているように思われます。

5. ブルネイ人は日本の軍政をどう評価しているか

以上、ブルネイにおける日本語教育の様子を述べて来ましたが、これまでブルネイ人は日本の軍政、日本語教育をどう評価して来たのだろうかという点に注目しなければなりません。しかし、このようなことを調査した記録を知らないし、また、恐らくそうした調査もなかったと思います。

そこで、次の2つの資料によって、その片鱗なりとも考えて見たいと思います。まずは、ブルネイの中等歴史教科書 (SECONDARY HISTORY FOR BRUNEI DARYSSALAM) を参考に現在のブルネイ人の代表的な考え方を考えて見ます。次に、人々の生の声を記し、私が実際に聞きえた範囲ですが、人々の考え方、思いを紹介してみたいと思います。

5-1 ブルネイの中等歴史教科書

これまでもたびたび引用したブルネイの中等歴史教科書『SECONDARY HISTORY FOR BRUNEI DARYSSALAM』ですが、この本の第4章を「日本占領期」(「JAPANESE OCCUPATION OF BRUNEI 1941—1945」)と題して、次のような内容になっています。

- (1) 日本の侵略
- (2) 日本軍のブルネイ統治
- (3) NIPPONISATION
- (4) 連合軍による解放

(5) 日本占領によりもたらされたもの

具体的には(1)日本軍の侵略では、日本軍の侵攻状況、イギリス政府の「石油破壊計画」、日本人スパイ、1941年12月22日、バンダルが占領される、といった記述が見られます。(2)日本軍のブルネイ統治では日本軍のミリ統治の様子と。「憲兵隊」のことが述べられており「憲兵隊」に対する恨みが今でも聞こえてくるようです。

ここで注目すべきは(3)の「NIPPONISATION」で、日本語は公用語、国旗、国歌、軍票、といった日本の施策についてかなり詳しい言及をしていることです。更には日本語教育の様子、日本との交換プログラムにもかなり客観的な記述をおこなっています。

そして、(5)日本占領によりもたらされたものとして次のような記述をしています。まず悪い点として、日本がブルネイにもたらした苦難(3年間にわたる日本のブルネイ占領は経済と社会発展の停滞とをもたらした。食料と医薬品の不足からコレラや流行性のマラリアが発生した。)を挙げています。しかし、一方で良い点として、ブルネイ人の意識の目覚めと民族の自決(政治の分野においては日本の占領はブルネイマレーの愛国者としての意識を成長させる基礎になった。日本が行った「Nipponise」によって地元の若い人々に与えられた機会と訓練は後に愛国の意識を持つ人々に対してリーダーシップをとれる政治的に有能な人々を生み出した。日本の占領体制下での困難や苦痛は自らの国は自らが治めなければならないものであり、国の運命はその国の人々によって決定されなければならないという意識をブルネイにもたらした。)を挙げています。

こうした日本軍政に対する評価は他地域比べあまりにも寛容すぎ、かえって印象的です。

(筆者注15:澤田によれば、

「反面、ブルネイとミリを含むミリ州では日本軍政部とブルネイのサルタンとの協力関係が上手く行っていた事と、ブルネイ政府が開戦前から事態を想定し大量の米を備蓄していた事に加え、部隊が食料自給のために真剣に農園を開拓しさつま芋やタピオカの栽培を大規模に行っていたため食料不足が暴動反乱を呼び起こす引き金とならなかった事と、ブルネイ人自身による自警団や民兵が組織され治安が維持されていたため、記録に残される程の日本軍に対する抗日行動は起こりませんでした。」

とあるように、反乱、虐待、虐殺のような忌まわしい記憶があまりなかったことによるのであろう。

しかし、他の地域と比べて、いくらかましかったというだけのことで、大変なことには変わりなかったのであり、それは個々人の証言によっても明らかです。

(これほど平和なブルネイでも中国人に対する虐殺があったことが語り継がれています。)

5-2 直接聞きえた個人の感想

さて、次に私がブルネイで直接聞きえた事柄を述べます。

(1) Pehin Jamil 氏の場合

「日本は、日本人は優れた国であり人々である。それは私だけでなく多くの人が認めるとこ

ろである。しかしながら、あの日本占領時代に地元のブルネイ人は本当に筆舌に尽くしがたい辛酸をなめたのである。「憲兵隊」「軍票」等忌まわしいことが実に多くあった。そのことを私の次の世代はもう知らない。あの時代に何があったのか、それだけは伝えていきたいのだ。」(『小史』)という日本軍政批判の言葉があります。勉強できたこと、様々な経験ができたことは嬉しかった。しかし、それを差し引いてもやはり軍政は忌まわしいことだったのでしよう。

(2) モクシン氏の場合

当時、お金は日本軍(軍票)だけになり、イギリスはじめ他のお金は一切流通しなくなった。この軍票には、人々の実にいやな思い出を残した。私自身も苦しめられた。

実生活では、戦争の1年目のうちはそれほどでもなかったが、2年目くらいからは、米はなくなるし、生活物資は悉く尽き、実に厳しい惨めな生活を強いられた。食べ物もなく衣類もなく、しまいにはカーテンのようなものを加工してズボンを作ったりした。

占領の最後の頃には日本軍の命令で、サトウキビ作りをさせられたり、いも作りもさせられた。当然のことながら、医療にまわす余力もなく、多くの人が死んでいった。様々な面で耐え難い経験をした。

前後も日本軍への協力者ということで、あまり良いことはなかったようです。やはり思い出としては懐かしいものであっても、戦争はつらいことでした。

(3) ブルネイの日本大使館の元現地職員のH氏：軍票の問題、

ブルネイには「バナナ・マネー」と呼ばれた「軍票」がまだまだいろいろなところに沢山残っている。沢山あるということは沢山発行されたことに相違なく、この軍票や軍政のためどれだけの人々が苦しんだか想像できない。2001年の現在でも、家にたくさん保管してある、見たければ、いくらでも見せましようとのことだった。

軍票は現在でもアジア各地にあり、戦争、軍政の大きな爪あとといえます。

(4) ブルネイ教育省の職員I氏：地元ブルネイの方から日本の映画、日本の歌。

「私の父の世代には片言ではあるが、日本語が聞き取れる者がいる。お前もうかつなことは話さないように注意した方がいいよ」これは冗談であるが、年配の方で日本語を理解する方が沢山いたのも事実。私の父もおそらく日本語が少し理解できたのであろうと思う。父は日本語と思われる歌を口ずさんでいた。こんなメロディーである。日本語でなんという歌なのか知っていたら教えて欲しい。また、そのテープやレコードがあったら日本でみつけて欲しい。

(筆者注16:そのメロディーというのは、あるいは「支那の夜」か、と思われるが、判別は難しかった。哀調のある曲で、

題名は正確には分からないが、恐らく日本軍人により伝えられたものであると思われます。)

こうした証言をみると、当然のことながら占領下で苦勞された方の現実の生活の厳しさや恨みに近いものまで、実に様々な感想が出てきます。

現実での日本軍政に対する批判と、当時の教育や、人々の出会いといった懐かしさが拮抗するという感じなのではないでしょうか。

6. おわりに

つたないものですが、これまで考えてきたことをまとめてみました。こうしてまとめてみますと、自分ひとりの力の微力さを感じます。これからも研究を継続して参りたいと考えておりますので、この方面に関心をお持ちの方々のご協力を切にお願い致します。

今回こうした発表の場をご提供いただきました日本語教育史研究会に対しましてあつく御礼を申し上げます。とりわけ関先生、平高先生にはお世話になりました。記して感謝申し上げます。また、この方面の先駆者である松永先生からの資料のご提供、そして取材に協力して下さいましたブルネイ大学の佐藤宏文先生にあつく御礼申し上げます。

(2005年2月)

ブルネイ日本語教育史メモ:(2005年2月現在)

日本占領下で日本語教育を受けた方への聞き取り調査の結果 (2004年11月6日、ブルネイにて)

- 私は仕事の関係で1999年から2002年までブルネイに滞在する機会を得ました。その際、ブルネイ及びボルネオ島の日本語教育の歴史に興味を持ち、2001年、ブルネイでのシンポジウムの際に『ブルネイ日本語教育小史』と題して発表したことがあります。この『小史』では、ペヒン・ジャミル氏へのインタビューを中心に戦前、日本占領下の様子についても若干ふれました。その後も、なかなか調査を継続することもできませんでしたが、今回所用でブルネイを訪問した際、占領下で日本語教育を受けた方にお会いしお話しを伺うことができましたので、そのインタビューをここに記します。

1. 聞き取り調査について

インタビューに応じて下さったのはHaji Moksin Chu Chu氏。(以下「モクシン」氏と表記する。)

聞き取りの日時は2004年11月6日の午後で、場所はブルネイの「ブキットシャバンダール」(ブルネイ インペリアル ホテルのすぐ近く)であった。通訳をブルネイ大学の佐藤宏文教授にお願いした。

2. モクシン氏の履歴

2-1 年齢

年齢に関してはご自身も正確には分からないのだということだった。ブルネイだけではなく、日本のように戸籍の制度もない国や地域では、往々にしてこうしたことはみうけられる。ただ、41歳の時に生まれた息子が今年53歳になるので、単純に計算すれば今年94歳であり、1910年生まれということになる。もし1910年生まれということならば、日本軍がブルネイに入って来た1941年当時、は30歳前後だったということになる。

2-2 生まれたところ;

生まれはブルネイのカンポン・プムラ(現在のブルネイのブルネイ・ムアラ行政地区内)であり、そこで大きくなった。

2-3 日本軍が入ってくるまでの生活:

日本軍が入って来るまでは、このブルネイで、現在のボルキキア王のお父さんの兄(弟?)のところで、働いており、いたって普通の生活を送っていた。

3. 当時の日本人及びブルネイでの日本社会

当時、ブルネイには日本人も日本の会社もほとんどなく、テンブロン地区にやしの実を扱う会社があったくらいであった。当然、モクシン氏もこれまで日本人との付き合いはなかった。

(筆者注2:「テンブロン地区」は現在のブルネイ領、地図を見ていただければわかるが、「飛び地」になっていて、陸路では行くことができない。)

4. 日本軍ブルネイ支配開始:

第2次世界大戦が開始され、日本軍がブルネイに入ってくると同時に、われわれは一箇所に集められた。それから学校というよりもキャンプのような感じで、勉強と勤労奉仕の日が始まった。

招集をかけられた時点で、ある者は山間部へ入り、戦況を静かに見守った者、また戦争そのものの成り行きを知らずに4、5年時を送った者もいる。ブルネイの場合、一度ジャングルに入ってしまうと、当時のことで、そう簡単に発見されることもなかった。また、ジャングルのサバイバル生活に慣れている者は、自分たちだけで、孤立してでも生活することは可能だった。

(筆者注3:この「招集」というのは、正確に何うことはできなかったが、半ば強制であったようである。)

(筆者注4:この日本軍がブルネイに入ってきた当時の状況は、澤田によれば下記のように述べられている。

「一九四一年一月二三日、出撃命令を受けた南方派遣軍第一八師団、第三五旅団長川口清健少将率いる歩兵第一二四連隊は、停泊していたフランス領インドシナ(ベトナム)のカムラン湾を、ボルネオ島にむけ出港しました。

風速三六メートルに達する強風波浪と、敵の潜水艦、航空機の攻撃にさらされながらブルネイのセリア、サラワクのミリに近づき、一月一六日未明上陸を決行しました。

七百名の英国警察隊は油田施設、弾薬庫を爆破し敗走し、連隊はセリア、ミリを制圧しました。

セリアを制圧した日本軍は、陸路首都であるブルネイタウンの攻撃に向かい一月二二日にはブルネイタウン(バンダルスリベガワン市)を占領、ブルネイ政府のイギリス人官僚を全員逮捕拘留しました。

一月三十一日、日本軍はブルネイ全土を占領、一九四二年一月二四日にはサラワク、サバを含む北ボルネオ全域を占領、開戦から僅か二か月足らずの内に北ボルネオを手中にし、日本軍政下に収め、占領地に於ける支配体制を作り上げるため、四月一日ボルネオ守備軍を二千人の人員で発足させました。』)

(筆者注5:松永典子先生の『日本軍政下(一九四一年～一九四五年の北ボルネオにおける教育施策—一九四二年、一九四

3年「北ボルネオ軍政概要」を中心として』(言語教育センター『ポリグロシア』(第7巻)2003年3月31日発行 抜粋)のP66に

「北ボルネオ」は東から順に東海岸州(東海州)、西海岸州(西海州)、美里(ミリ)州(ブルネイ県を含む)、志布(シブ)州、久鎮(クチン)州の5州に区分された。軍政を管轄する司令部の他に地方機関としてそれぞれの州には州政府(州長)が置かれ、その下に14の県庁が置かれた。さらに、郡、郷、村落といった行政区画も割り当てられていたが、山間奥地に至る軍政の浸透は困難を極めたようである。」

とあるが、一度この地域に行ってみれば、特にブルネイのように当時のジャングルが残っている地域では容易に理解できることである。筆者も何度か、ブルネイの戦跡を見学しにいったが、ジャングルに近いところは様々な困難があることを、身をもって体験した。

5. 学校のあった地点:

集められた地点は、現在のバンドルの中心地、ジャラン・スルタンの地点で、現在の香港上海銀行のある地点であった。ここはブルネイタウン(バンドル スリ ブガワン)の中心地であり、カンボン アイル(水上集落)から歩いてでも通うことができた。現在のカンボン アイルと違い、それは沢山の人がいたものだった。陸上よりも水上の方が活気があったくらいだった。

(筆者注6:この証言は、ブルネイ歴史センター所長の Pehin Orang Kaya Amar Diraja Dato Seri Utama (Dr) Haji Awang Muhammad Jamil Al-Sufri 氏の証言と一致する。ジャミル氏も同じ地点で勉強された。

「日本語の教室には様々な施設が使われた。学校も使われたが、私(Pehin Jamil 氏)が学んだのは現在の「香港上海銀行」(住所: Corner of Jalan Sultan And Jalan Pemancha B. S. B)の隣のビルであった。」(『小史』より)

6. 日本語を勉強し始めた理由:

日本語をある程度積極的に習った理由は、なんとといっても、戦争の時代で日本語を知っていることは仕事にありつくためにも、保身のためにも有利だという実利的な面からだった。

(筆者注7:こうした動機は他の地域でも同様であった。

斎藤正雄『香港における日本語教育の歴史と今後の展望』(マカオ大学シンポジウム、1994年)にも、日本軍の日本語講習所での受講動機として下記のような証言を載せている。

「当時の学習者が、なぜ「警備隊」の日本語講習所で学んだかといえば、その最大の理由は身の保身にあったと思われる。つまり、軍、憲兵からの尋問を受けた場合、「警備隊・日本語講習所」の学生証を持っているということは身の安全に直接結びついたからである。」

7. 日本語教育の具体的な内容

- 日本語教育といっても軍人が教えるだけのもので、体系的な勉強はできなかった。その内容も、日本の唱歌、挨拶、掛け声、号令、数字、本当に基本的な言い回しを覚え

たくらいである。

- 学校でテキストが配られることもなかった。何冊かあるテキストをみんなでノートに書き写し、利用した。また、そのノートは学校においてくるぐらいの程度のもので、レベルは低かった。
- 教師は教えようにも訓練を積んだ教師ではないので、うまく教えることはできなかった。また、学習者側も、辞書さえもない状況であり、仮に知りたい言葉や言い回しがあれば、だれか日本語ができるものが、日本人に聞いて覚え、それを他の者にマレー語で説明するくらいしかできなかった。
- 日本の歌は今でも覚えている。「君が代は・・・」「みよ、東海の空開けて・・・」こんな歌を毎日歌った。
- 1, 2, 3・・・のような数字を、数字としてよりも掛け声として覚えてる。また、「右向け右」「左向け左」「回れ右」等の掛け声も覚えている。

(筆者注8:モクシン氏は突然立ち上がり、「1, 2, 3」の掛け声をかけながら、銃を上げたり下げたり構えたりする動作をされた。言葉というよりも、その動作と共に記憶にしっかりと刷り込まれているという様子だった。

また、「こんにちは」「おはようございます」「これはなんですか?」「これは頭です。」という例をあげ、こんな風に日本語を習ったという話をされた。)

8. 日本語以外の科目;

日本語のほかには刺繍、絵つけ、彫刻等の技術を学んだ。しかし、その後の生活では、実用には至らなかった。しかし、これまでにそうした学ぶ場を持ったことがなかったので、非常に興味深くそれを学んだ。

9. 学校の規模:

学校は(学校というよりもキャンプ的なもの)であったが、そこは午前と午後に分かれて授業を行った。

大まかに言えば午前500人程度、午後500人程度、合計で一日に千人前後の若者が学んだ。ここで学んだ人たちはほとんどカンボン・アイル(水上集落)に住んでいた人々であった。そこにいた若者が、入れ替わりここに来た。

(筆者注9:「カンボン・アイル」というのはブルネイの川の上に作られている水上集落である。今でこそ、このカンボン・アイルに住む人は少数グループであるが、当時はブルネイタウンといっても、このカンボン・アイルこそが町の中心で、逆に陸上の家屋の方が少数であった。

もっと言ってしまえば、当時のブルネイ(ブルネイタウン)の実態はこのカンボン・アイルと陸上のおおよそ500メートル四方の繁華街程度のものであったと考えられる。)

(筆者注10:今回筆者はブルネイ博物館を訪問した。ブルネイ博物館には当時の資料や写真が残っていた。その資料によれば、1941年当時ブルネイの自動車台数は64台、バイク356台ということである。また、当時の人口は約4万人で内マレー人が3万、中国人とインド人、その他があわせて1万人程度であった。学生数も1746名であり、内女学生が312人いた。

(筆者注11:私(齋藤)も『小史』の中で、次のように書いた。

「また、日本側の資料である、昭和17年ボルネオ守備隊作成による「ミリ州ブルネイ県軍政概況」によれば、「学校はマレー一学校28校、華僑学校7校、その他3校、計38校で生徒数は2574人(この数字は教育適齢児童の13分の1である)」とあり、当時修学適齢期の児童の圧倒的多数は学校に通うことはできなかった様子が分かります。

また、当時ブルネイには英語で教える学校もちろん日本語で教える学校ありませんでした。英語で教える学校がブルネイにできたのは1953年になってからのことです。」

1941年の1746名から1942年には2574名に増加しており、世情がある程度安定してきた状況がうかがわれる。

10 卒業後:

この学校で1年間学んだ後、モクシン氏は「召使」として日本軍に所属して、下働きのな仕事をした。

(筆者注12:この「召使」という言葉はモクシン氏のご自分で、日本語で表現されたものであった。「召使」という日本語の意味をご存知かと伺ったところ、「もちろん」とのことだった。通訳の方にも確認をしてもらったが、正確に意味を理解されていた。)

11 日本軍のもとで働く:

その後憲兵隊に所属し、働いた。

憲兵隊は「マエモト」という部隊であった。また、このほかに「オサダ」部隊という名前も覚えている。仕事の内容は軍の「召使」、下働きであった。つまらない仕事では、慰安所の守衛のような仕事もしたことがあった。

終戦の間際には現在のブルネイ空港ではなく、戦争の時代に作られた地元で「オールドエアポート」と呼ばれている空港の建設にも従事した。終戦に近い時期で極めて困難な建設だった。この建設工事の間に仲間が敵の空襲で亡くなったこともあった。同じ現場にいあわせ命からからがら逃げまわったこともある。

また、ラブアン島へ行って仕事をしたこともある。

(筆者注13：このラブアン島での仕事の内容を聞くことができなかったが、澤田によれば

「ボルネオ守備軍は、将来の作戦を考え重点に飛行場を建設する命令を受け、ブルネイタウンとブルネイの海上五五キロ沖合にあるラブアン島に飛行場を建設する事が決定されました。

ラブアン飛行場建設のため、ボホート(現在のサバ州)より三百名、ブルネイより二百名の徴収使役を集められ突貫工事の重労働によって九月五日ラブアン飛行場が完成しました。

このラブアン飛行場の開場式に出席するため、クチンを出発した前田利為中将は、ピンツル沖合で墜落死し、飛行場の完成を見る事無くこの世を去りました。

前田中将の死去に伴って、ラブアン島は前田島と名を替え、山脇正隆中将がボルネオ守備軍司令官として赴任しました。

ブルネイ飛行場は広大なゴム林を伐採して建設が進められましたが、建設が進むにつれ戦況が悪化し、制空権は連合軍の手に渡りつつありました。

軍司令部は日本軍の戦闘機が撃墜され数が減り飛行場建設の意味が薄らいで来た事と、逆に連合軍に使用される事を恐れて幾度も建設命令を変更しました、が結局造りかけのブルネイ飛行場は破壊されました。」

とあり、モクシン氏もこの飛行場建設に動員されたのではないかと思います。

1.2 当時の日本軍の印象：

日本人を恨むつもりもないが、戦争当時のことで、日本人兵だけでなく朝鮮人兵にもひどいのがいた。特に朝鮮人兵にはひどく威張り散らしたやつがいて、今でも思い出すと腹が立つ。また残忍なのもいて、盗み容疑の地元のインドネシア人が油をかけて焼き殺された場面に遭遇したこともあった。

(筆者注14：ブルネイの歴史教書にも次のような記述が見られる。

「地元の人々は以前と同じように働いていった。日本軍は人々の心や思いを日本の方へ引きつけようと努力していた。なぜなら土地の人々は日本に対して強い憤りを持っていたからである。特に、地元の人間は日本軍の兵士に会ったとき、おじぎをさせられていた。この日本の習慣の強制はひどいものであったし、特に占領以前からその土地に住んでいた日本人の役人から強制されることは耐えられないものであった。」

1.3) 戦後日本軍のもとで働いたことは長く秘密にしていた：

私のように日本軍のために働いた、憲兵隊のために働いたというのは地元の間人としては決してほめられることではなく、戦後はしばらく当時のことを秘密にしていた。

場合によっては当局に捕まる(?)こともあった。

日本人を恨むものではないが、結果として日本人がもたらした戦争は人々に多大な苦しみを与えた。

(筆者注15:筆者には、このくだりは、正確には理解できなかった。ただ、モクシン氏の娘さんが手錠をかけられるしぐさを盛んにしていたので、「逮捕」「拘留」というような意味合いかと筆者が勝手に理解したものである。)

(筆者注16:ブルネイの歴史教書にも次のような記述が見られる。

「憲兵隊」と呼ばれる日本の軍事警察の活動は人々を圧迫した。この憲兵隊は罪を犯したのではないかと容疑をかけた者に対して情け容赦ない拷問をした。あるものは憲兵隊に捕まり拷問された。ブルネイの地元の者はガドンに、ヨーロッパ人はクチンの Kampong Batu Lintang に拘留された。そうした人の中には英国人も、英国人でない人もいた。」

1.4 日本軍と地元民のコミュニケーション:

では、こうした部隊での日本人と地元の間とのコミュニケーションはどうしていたのかというと、日本人の側に通訳がいて、その通訳がほとんどのことを伝えたので、それほど困らなかった。

戦争の前から6人の日本人がその身分を隠して、地元に入り込んでいた。この6人のうち4人はマレー語ができ、イスラム教徒に混じって「コーラン」も読めた。また、2人は中国語ができた。こうした通訳がいたので、実際のコミュニケーションはさほど困らなかった。

この中で、スボック(ブルネイの地名で、中心街に近いところ)のシバタ(柴田?)という日本人を覚えている。この人の使用人が悪い人間で、それで今でも記憶に残っている。

(筆者注17:まったくの私事になるが、これと同じ話を、私の妻の母(義母)から聞いたことがある。私の妻はタイ人で、バンコク出身であるが、義母は南タイ(スラータニー)で生まれ育った。義母の生まれ育った地でも、上記のブルネイと同様にその地に溶け込んでいた日本人が開戦とともに、日本側の通訳になって活躍したのを覚えている。義母はそれまで、そのいわばスパイ活動をしていた日本人に大変良くしてもらった、かわいがってもらっており、幼いながら非常にショックな出来事であった、と回想している。)

また、前田均先生より、タイ映画に『少年義勇兵』という映画があり、主人公の少年の姉の夫が日本人の写真屋で、実は日本のスパイで、日本軍上陸の手引きをするのを知ってショックを受ける場面がある、との情報をお寄せいただいた。)

1.5 軍票の問題

当時、お金は日本軍(軍票)だけになり、イギリスはじめ他のお金は一切流通しなくなった。この軍票には、人々の実にいやな思い出を残した。私自身も苦しめられた。

(筆者注18:これは日本の「軍票」で、地元では「バナナマネー」と呼ばれていた。お金の図柄にバナナが入っていたか

らこう呼ばれた。モクシン氏はこの「バナナマネー」を持っておられ、実際にわれわれにも見せてくれた。

16 戦時下のブルネイ経済や人々の生活

戦争の1年目(1941、2年)、のうちはそれほどでもなかったが、2年目くらいからは、米はなくなるし、生活物資は悉く尽き、実に厳しい惨めな生活を強いられた。食べ物は無い、衣類もなく、しまいにはカーテンのようなものを加工してズボンを作ったりした。占領の最後の頃には日本軍の命令で、サトウキビ作りをさせられたり、いも作りもさせられた。

当然のことながら、医療にまわす余力もなく、多くの人が死んでいった。様々な面で耐え難い経験をした。

(筆者注19：ブルネイの歴史教書にも次のような記述が見られる。

「日本軍がブルネイを占領していた時代、日本軍はより優れた統治制度やブルネイのインフラ再建には興味を示さなかった。日本軍の怠慢な政策により、食料、衣料品が次第に不足していくなど、広い範囲における困難が引き起こされた。」

「日本軍はまた、日本の切手やお金(「軍票」筆者注)も持ち込んだ。その初期「バナナ」紙幣と呼ばれ、それなりの価値を持っていたが、たくさん印刷され次第にその価値がなくなっていった。」

「3年間にわたる日本のブルネイ占領は経済すべてと社会発展の停滞をもたらした。特に第1次5か年計画やもたたくさんの学校を作るといったようなあ他らしい計画は進まなかった。また、人々をいなかに住ませ作物を作らせるころみもあった。食料と医薬品の不足からコレラや流行性のマラリアが発生した。」

(筆者注20：澤田によれば、

「反面、ブルネイとミリを含むミリ州では日本軍政部とブルネイのサルタンとの協力関係が上手く行っていた事と、ブルネイ政府が開戦前から事態を想定し大量の米を備蓄していた事に加え、部隊が食料自給のために真剣に農園を開拓しさつま芋やタピオカの栽培を大規模に行っていたため食料不足が暴動反乱を呼び起こす引き金とならなかった事と、ブルネイ人自身による自警団や民兵が組織され治安が維持されていたため、記録に残される程の日本軍に対する抗日行動は起こりませんでした。」

とあるが、他の地域と比べて、いくらかましかったというだけのことで、大変なことには変わりなかったようである。

17 ブルネイ博物館のこと

1998年、ブルネイ博物館は「日本占領下のブルネイ」という特集を組み、いろいろなものを展示した。しかし、多くは個人の所有になるもので、コピーできるものはコピーで記録を残しその後、所有者のもとにお返しした。

ブルネイ大学の佐藤宏文教授によれば、佐藤教授はその展示を実際にご覧になっており、そ

の展示の中に、ミリの日本軍の名前で日本語を履修し、卒業したことを証明する旨の「卒業証書」があったとのことである。

(筆者注21:当時のブルネイはミリ州のなかのブルネイ県位置付けだったので、状況的に考えて、ブルネイの地域の方が、ミリで日本語を勉強したと考えるのが妥当かと思われる。今でこそ、ミリとブルネイタウンはマレーシアとブルネイという関係になっており、国境でのチェックも厳しいものがあるが、この戦争の当時、そうし「国境」というイメージはほとんどなかったようである。)

追記: 以下全く個人的な事ながら、この聞き取りとは別に私のブルネイでの生活やモクシン氏との思い出を書き残しておきます。

このモクシンさんとはじめてお会いしたのは2001年の夏ごろでした。私は、この春に腰を痛めてしまいました。いわゆる「椎間板ヘルニア」で、歩くこともままならないほどひどく痛みました。注射、針治療、整体、漢方薬等およそ考えつくことはすべて試したがなかなかよくなりず、つらい日々を送っていました。医者からは歩くことを勧められ、今日は50メートル、明日は100メートルと少しずつ距離をのぼし、リハビリに励んでいました。

そんな折、私の家からさほど遠くないところに「ブキットシャバンダー」という岡(岡というより小高い山ですが)があり、そこは公園として整備されており、かなり登り下りの厳しい山道があるのでリハビリにはもってこいだということを教えてもらいました。かなり歩けるようになった私は、この山道に挑戦しました。一周で1時間程度の山道ですが、はじめはなかなか全行程を歩くことはできませんでした。しかし、歩けるようになると、楽しくなって、時間を見つけては歩くようになりました。

この「ブキット」の入り口には何軒かの売店とういか茶店があり、お茶やコーラそれにお菓子などを売っていました。私も、山登りを終え、この店に立ち寄ってお茶を飲むのが楽しみでした。

私がよく行った店は50前後の女性と、その娘さんと思われる方でやっていました。愛想のいい娘さんで、時折英語で話しかけてきました。また、その店には老齢のおじさんがいて、私を見ては、「日本人か」「よく来たな。」といつも声をかけてくれました。私もこの店でお茶を飲みなが「日本では今頃桜が咲いている」というような、たわいもない世間話をしました。このおじさんが、どうして私の顔見るたびに「日本人か」「日本人か」と尋ねるのか、その時は分かりませんでした。

実はこのおじいさんこそが今回インタビューに応じて下さったモクシンさんで、私としては60年も前に、このブルネイで日本語教育を受けた方とは思ってもみなかったことでした。モクシンさん、そしてその家族が醸し出すなんともほのぼのとした雰囲気が好きで、「ブキット」へ行くたびにこの店によりました。

2002年夏、私は任期を終え、帰国の時が来ました。私は帰りに家族のみなさんに記念にキーホルダーを差し上げ、いつかまた再会しましょうと言い残しブルネイを後にしました。

私は日本で忙しい生活を送るうちにいつしか、モクシンさんはじめこの家族のことも思い出のかなたに消えつつありましたが、2年半後の2004年11月、所用でブルネイを訪問した時、私はこの「ブキット」を再訪し、汗を流しました。そして再びこのモクシンさんの家族にお目にかかり話し込んでいるうちに、このモクシンさんが、実は60年も前、日本占領下で日本語教育を受けた方だということを知ったのです。

せっかくだからもう少し詳しい話を聞かせて欲しいと、ラマダン(断食月)の時期の午後にもかかわらず、私はモクシンさんのもとを訪れ、上記のような話を聞かせていただきました。所用があつてなかなかいい時間帯に訪問することもできず、ラマダンの午後の暑い時間帯に訪問することになってしまったのは心苦しいところでした。それにもかかわらず、クシンさんはお元気にいろいろと答えてくださいました。

そして、夕暮れ時、家族の方に「スダー。スダー(マレー語で、断食の時間はもう終わったか。)」と確認をとり、それはおいしそうに水を飲み干していらっしゃいました。

別れ際に、モクシンさんは記念だと言って、古いブルネイのコインを5枚ばかりくださいました。コインの収集はモクシンさんと私の共通の趣味でした。

最後に記念写真をとり、わかれました。

(以上)

ブルネイ日本語教育小史

齋藤正雄

- 1 はじめに
 - 2 日本語教育のあゆみ
 - 2-1 第二次世界大戦前
 - 2-2 ブルネイ独立以前
 - 2-3 ブルネイ独立以降
 - 3 おわりに
- 参考文献

(要旨とキーワード)

小論ではブルネイにおける日本語教育の歴史を述べたい。その際になるべくブルネイの歴史的な背景も触れたい。

具体的には、(1) 戦前(1945年以前)、(2) 戦後のブルネイ独立以前(1945年～1984年)(3) 独立以降(1984年～現在)というふうに、便宜上3つの時代に区分し記述する。

幸いなことに、ブルネイ歴史センター所長の Pehin Orang Kaya Amar Diraja Dato Seri Utama (Dr) Haji Awang Muhammad Jamil Al-Sufri 氏に日本占領下の時代とその後半世紀に渡るブルネイの変化とについてお話を伺う機会を得た。

ブルネイにおける日本語教育研究史は全く未知の分野である。将来この分野を志す方に対し参考文献を記しておくだけでも意義あることではないかと考えた。また、これまでに日本語教育を支えて下さった方々に対し敬意を表すると同時に広く顕彰するのも、私ども後輩の務めの一と考える。

(キーワード)

ブルネイ日本語教育・官吏養成所・日本軍政・南方留学生・ブルネイ教育省日本語クラス

1 はじめに

私は1999年4月よりブルネイにおいて勤務しています。私はこれまでに香港、インドに勤務する機会があり、そのつどその土地の日本語教育の歴史をまとめてみました。(注1)ブルネイで教えている間に、多くの方にお会いできたり様々な文献の存在を知りました。ブルネイにおいては、これまで日本語教育の歩みについて記されたものはまだなく、なんとか当地に勤務できる間に書き留めておきたいと思っておりました。幸い、ブルネイ歴史センターのPehin Orang Kaya Amar Diraja Dato Seri Utama (Dr) Haji Awang Muhammad Jamil Al-Sufri氏(以下、Pehin Jamil氏と省略)に日本占領下の時代のお話を伺わせて頂いたり資料の御提供を頂いたりしました。(注2)

以下、本稿では同氏のお話を中心に、ブルネイ日本語教育の歴史を、その社会的な背景を交え考えて行きたいと思います。

2 日本語教育のあゆみ

2-1 第二次世界大戦前(1945年以前)

2-1-1 社会的背景

第二次世界大戦の勃発によって、それまでほとんどなんらの関係もなかったブルネイは日本により約3年半に渡って占領されることとなります。(注3)そして、突然日本語教育が実施されることとなります。こうした事情は日本軍政下におかれた他の地域もほとんど同じようだったようです。香港やシンガポールやマレーシア等の状況も似ていました。

さて、私達はまずこの時代の背景を考えなければなりません。1930年代の後半になり、中国大陸での抵日運動が激化し、日中戦争は長期戦になりました。こうした情勢の打開策として考えられたのが「南方進出」でした。これはアメリカ、イギリス、オランダなどからの対日石油輸出禁止制限に対抗するための方策でした。いわゆる南進政策は、時の「大東亜共圏」というスローガンのもと日本の南方侵略を合理化する言葉になって行きます。(注4)「こうして1941年太平洋戦争勃発と同時に、日本は東南アジアへ武力進出し、フィリピン、シンガポール、ビルマ、蘭領インド(インドネシア)を次々と占領、軍政を施行して日本語教育を実施していったのである。」(注5)という状況になりました。

さて、日本軍政下で行われた日本語教育では現在とは異なるもので、日本の民族的な優越感や大国主義が前面に押し出されたものでした。日本は大東亜共栄圏の共通語、東亜語としての日本語を掲げましたが、その裏には欧米列強との対抗意識がありました。また、「日本精神としての日本語」という点が盛んに強調されていますが、翻って考えれば、それは日本の優越感の現れであり、他民族を低く見、自らを高い所におくということにほかなりませんでした。そして、その教育現場では「皇国教育を中核として、日本語教育並びに精神教育を徹底」「偏知教育を排して技能教育を拡充強化」という目標が掲げられたのですが、つまりは「日本語・日本文化・日本精神の押し付け、技能教育を施し、日本語で操り、現地の人々を戦争

遂行に奉仕させる。」という側面があったことを、私達は忘れてはいけないと思います。(注6)

日本占領下のブルネイにおいても、こうした延長上に多くの事柄が進められたのではないかと想像されます。

ブルネイと日本との接触は戦争によって突然日本軍が乗りこみ、敗戦によって突然だれもいなくなってしまうという結末で終わったようです。以下、歴史的な流れを、時間を追って見てみましょう。

ところで、その前に考えておかなければならないのは、60年前の当時と現在とでは地理感覚とはかなり違ったものであったということです。つまり、現在、私達の視点は、まずブルネイ国があり、その首都バンダル・スリ・ブガワンがあり、このブルネイの首都から四方を見回すような感覚になれてしまっていますが、当時はミリやブライト地方の間には国境もなかったし、北ボルネオの一部として認識されていたに過ぎなかったのだらうと想像されます。また、実際に北ボルネオの主要な都市といえばクチン、コタキナバル、サンダカンなどであったわけです。(注7)

(主な流れ)

* 1941年

11月 石油資源確保のため、ベトナム東海岸のカムラン湾に巡洋艦、駆逐艦の護衛の下に、上陸部隊を乗せた大船団が待機。

12月12日 スマトラ島のパレンバンを占領。

12月16日 ミリ、セリア油田地域に歩兵35旅団(川口部隊)が上陸占領。

12月22日 ブルネイタウン(バンダル スリ ブガワン)を占領、英国の政府機関を接收。日本軍は日本語で書かれた文書に対してスルタンの署名を求めた。(注8)

* 1942年

1月24日 北ボルネオ全体を掌握。

4月1日 ボルネオ守備隊(2000名規模)が配備される。

4月28日 前田ボルネオ守備軍軍司令官到着。

ブルネイはミリ州に含まれ、ブルネイ県知事には木村強、ミリ、セリア、トウトンを統括するミリ県知事には松村存、ラブアン島庁には白田傳吉という布陣であった。ブルネイにおける日本の軍政は、日本人要員47名、現地職員750名規模。

(この年42年には、油田地帯であるセリアから港のムアラを結ぶ120キロにおよぶ自動車道路建設、ラブアン島とブルネイに空港建設。尚、ラブアン島の空港は完成したが、ブルネイの空港は途中で建設を放棄。)

* 1943年

- 10月9日 アピ事件(ゲリラ軍と日本軍の衝突)
2月 日本軍はスルタンの権威を利用する政策をとる。司政長官の諮問機関として参事制度が設けられスルタンは名誉参事に任命された。
(この43年には反日運動が始まり、食料不足、医療の問題(マラリア流行等)がおこる。)

* 1944年

- 7月7日 サイパン陥落。
10月33日 戦艦大和・武蔵を含む第2艦隊ブルネイに停泊の後レイテ沖に出航。
11月11日 第2艦隊大敗北を喫し再度ブルネイに戻る。戦艦武蔵沈没。

* 1945年

- 1月15日 ガダルカナル海戦。
5月22日 ラブアン島に米軍機飛来し投降を呼びかける。
6月7日 連合艦隊第7艦隊2万の人員でブルネイ沖に現れる。
6月10日 連合軍ラブアン島に上陸開始。(ラブアン島の日本軍は8月5日玉砕)
連合軍ブルネイタウン(バンドル・スリ・ブガワン)に進駐開始。
6月12日 日本軍は壊滅状態、ブルネイ市内から逃走。
8月15日 終戦。

2-1-2 日本語教育

(1) ブルネイの中学校用歴史教科書の記述から

ブルネイの中学校の歴史教科書 SECONDARY HISTORY FOR BRUNEI DARYSSALAM 3は全体で140ページですが、その約6%にあたる8ページを CHAPTER 4 JAPANESE OCCUPATION OF BRUNEI-JAPANESE OCCUPATION OF BRYNEI 1941~1945-が占めています。日本で第二次世界大戦と言っている時期は、ブルネイにとっては日本軍の占領期、日本軍政下の日々だった訳です。(注9)

以下、この教科書より日本語教育に関連した部分を訳してみます。(注10)

教育の分野では、日本はその短い期間に日本語を地元をめざましい勢いで普及させていた。ブルネイの町では約30人の教師が3か月にわたり訓練されていた。こうした教師の中には Marsal bin Waun, Jamil bin Umar, Basir bin Taha, Tuah bin Hitam, Haji Idris bin Hamzah のような人がいた。こうした地元の教師のほかにも Terusan, Limbang, Miri からの教師もいた。

学校における日本語教育は日本語の歌を使って教えることで学生の負担は軽くなった。日本語を学ぶことは全ての政府職員に強制されていたので、夜間の学校でまなんだ。その

際、日本軍職員が指導に当たった。

日本の統治・教育は都市部ではうまくいったが、都市からはなれた田舎では教師の不足もありうまくいかなかった。しかし、3年間の日本占領時代に多くの地元住民は日本語を理解したり話すようになった。それは日本語の集中的なプログラムがあったからである。

この記述に関して Pehin Jamil 氏は以下のように述べられています。Marsal bin Waun 氏は当時教育課長の職にあった方である。Jamil bin Umar 氏は Pehin Jamil 氏ご本人のこと。Basir bin Taha は教育第2課長の職にあった方である。Tuah bin Hitam 氏は学校の教師をされていた。Haji Idris bin Hamzah 氏も学校の教師であった。みなそれぞれに若く、ブルネイで日本語を学んだ。せっかく学んだがその後実際に使う機会はほとんど無かった。また、教科書の記述にあるように Terusan, Limbang, Miri からも学びに来ていたし、地域間の連絡は密だった。

日本人の中で教えるための訓練を受けたことがあり、きちんと日本語を教えられる教師は1名だけだった。タカガワ・ジュンイチロウという名前の教師であった。その他は日本軍の兵士が教師役をしていたに過ぎない。当然のことながら日本人であるというだけではうまく教えることはできなかった。教材といってもこれといったものはなく、ただ、日々の片言の日常会話、日本の歌、体操の際の掛け声程度のものであった。仮にもっと勉強したいと思っても教材も教具もほとんどない状態だった。

日本軍のとった方策は「官吏養成所」を作り、そこで日本人がブルネイ人の教師に日本語を教える。そして、その勉強したばかりのブルネイ人教師がブルネイ人子弟に教える。そうした形で日本語の普及を行った。しかし、きちんと教えられる日本人の教師がいないのだからブルネイ人教師は実力が身につかない。先生自身に力がないのであるから、そのブルネイ人子弟に教えるのは難しい作業であった。

日本語の教室には様々な施設が使われた。学校も使われたが、私 (Pehin Jamil 氏) が学んだのは現在の「香港上海銀行」(住所: Corner of Jalan Sultan And Jalan Pemancha B. S. B) の隣のビルであった。

また、日本側の資料である、昭和17年ボルネオ守備隊作成による「ミリ州ブルネイ県軍政概況」(注11)によれば、「学校はマレー学校28校、華僑学校7校、その他3校、計38校で生徒数は2574人(この数字は教育適齢児童の13分の1である)」とあり、当時修学適齢期の児童の圧倒的多数は学校に通うことはできなかった様子が分かります。

また、当時ブルネイには英語で教える学校もちろん日本語で教える学校もありませんでした。英語で教える学校がブルネイにできたのは1953年になってからのことです。

また、上記「軍政概観」には日本語普及にも言及が見られ「日本語普及に付きは、ミリ市、ブルネイ市は、学校に正科として実施せしむる他、一般に日本の唱歌、体操等の授業を

行いつつある。」という記述が見えます。「正科」といっても、上記 Pehin Jamil 氏のお話から想像するにかなり貧弱なものであったようです。

さらに、現地での日本語の教師役を担わされた学校の教師に関してですが「マレー学校は、旧政府時代(イギリス政府時代のこと)は政府が費用全部負担し授業料を徴収せざりしものにして、現在は州庁及び県庁の経営とせり。華僑学校は従前その費用の一部は政府及び石油会社より援助し、他は生徒より授業料を徴収し経営費とせり。教員の待遇は最高62円、最低13円、その他は最高100円最低25円なり。」(括弧内は筆者の補足)という記述が見えます。

ところで、「南方留学生」として王族の一員ペンギラン ユソフ(Pengiran Mohammad Yussof)氏を南方特別留学生として、広島文理大学に送っています。当時ブルネイから日本へ行った唯一の留学生です。

「南方留学生」とは当時の日本政府が日本占領下の地域の青年を日本に集め、指導者育成を行おうとしたもので、宿舎、日本語教育、上級学校への斡旋などを、財団法人国際学友会に依頼しました。その結果、1943年(昭和18年)に98名、1944年(昭和19年)に101名が来日しました。ペンギラン ユソフ氏も1944年に日本へ行った101名の中の一人で、1945年3月まで東京で勉強し、4月より広島文理大学へ行きました。大学で教育学を専攻中、8月6日原子爆弾に遭遇してしまいました。(注12)

2-2 独立以前(1945年~1983年)

1945年から1983年の約40年間はブルネイと日本との間にほとんど交流がみられない時代です。

ブルネイは1960年代初頭の「マレーシア連邦加入」問題で大きくゆれます。一方経済的には1969年、70年の海底油田の発見により大変な発展を遂げます。1973年にはブルネイ LNG プロジェクト(ブルネイの天然ガスを液化して日本へ輸出するプロジェクト)が開始されます。

この時代は、澤田氏によれば下記のような状態であったと記述されています。(注13)「ブルネイに居住する日本人も、天然ガス関係の商社1社、建設関係1社、農業関係2社、その他政府に勤務する日本人1名と、シェル石油勤務者と国際結婚した婦人達の30名程度で、ほとんどブルネイでは日本人の姿を見かける事は有りませんでしたし、入国ビザ発行は、英国高等弁務官事務所を通じて各国の英国代表部が窓口となっていましたので、英国の意図が働き、日本人の入国ビザ取得はほとんど不可能と言える程に厳しく制限されていました。」

こうした時代であり、戦後40年にわたり、独学で日本語を学んだ方、教えたという方はいるかも知れませんが、組織的には何もなかった時代でした。

2-3 独立以降(1984年～現在)

2-3-1 社会的な背景

上述のように、1973年にブルネイ LNG プロジェクトが開始され、ブルネイと日本との関係はかなり密接なものとなってきました。一方で日本からブルネイへ自動車、機械製品をはじめ様々な雑貨も輸出されました。また、他の東南アジア諸国と同じように日本の現代カルチャーである歌・漫画・アニメ・ゲームマシン等々が入ってきました。

80年代後半という時代はブルネイにとって独立後の人々の向上心に燃えた、また経済的にもすべてが順調な時代であったようです。こうした時代を日本側から眺めると次のような年表が作れます。

1984年1月1日 独立、同時に日本の政府機関(大使館)開設。

1984年10月 日本人学校(全日制補習校)が始まりました。

1985年4月 日本人会発足。

1987年、日本の文部省からブルネイへ学校教員が派遣される。

同年、国際交流基金より日本語専門家が派遣される。

日本人会の活動も盛んになり、1980年代の終わりには120名前後の日本人会会員がいましたし、この当時ブルネイに長期短期に滞在していた日本人の数は150名以上とされています。日本人が働いている会社の数も日系、地元との合弁企業あわせ20社以上になりました。

こうした状況は60年代、70年代の「邦人30名規模」とは大きく変わっています。その後1990年代に入り、すべてが順調に推移していたところで、1997年のアジア経済危機を迎えました。

2-3-2 日本語教育の歩み

独立前後の精神的な高揚は日本語教育にも大きな影響を及ぼしたようです。

まず、1986年に現在のブルネイ政府教育省の日本語クラスに基礎ができました。

概要としては「1986年に教育保険省(現在の教育省)の社会教育事業の一環として開設された日本語講座の授業から始まっている。同講座は、ブルネイのある日本企業の現地職員、公務員、教員、専門学校生等の陳情によって開設が可能となったもので、1987年からは同講座の講師として国際交流基金から日本語教育専門家が派遣された。同講座は、現在、教育省技術教育局生涯教育課の日本語講座として授業が継続されている。」^(注14)のであり、この講座はその後絶え間なく継続され、これまでに2500名以上の方が受講登録をされました。^(注14)

また、80年代の後半には大学生達の日本語を学ぶサークルがありました。知識欲旺盛なブルネイの青年たちは日本文化に憧れにも近いものを感じていたようです。これまでも述べましたように、こうした現象はブルネイに限った事ではなく、東南アジア全域にわたって

日本現代文化ブームとでも呼ぶべき現象がありました。具体的には、アニメ、漫画、歌、映画、テレビゲーム、コンピューターゲーム等が人々の生活に深く入って来たのです。

こうして日本に関心を抱いたブルネイの若者は、日本の文部省奨学金で1989年ころからは毎年数名ではありますが、日本留学をはたしています。

一方、1991年から産業一次資源省において、国際機関アセアンセンター派遣日本語教師による「観光のための日本語教育クラス」が設けられており、これまでの述べ300名が受講されました。この日本語講座の研修期間は年に約2か月ですが、授業時間数は150時間程度あり、このコースからはブルネイの観光産業を担う人材が輩出され、現在もその講座が継続されています。

更に、2001年4月より「サルタン・サイフル・リジャル・テクニカル・カレッジ」の観光学科において日本語が選択必修科目として取り入れられましたが、日本語がブルネイの正規の学習課程で取り入れられたのは初めてのことでした。

また、2001年からブルネイ大学でも日本語講座が開設される予定になっており、ブルネイの日本語教育は実に大きな変化が生じようとしています。

教育活動に目を移すと、1987年には「日本語スピーチコンテスト」が開始され、今年で15回目を迎えます。伊藤氏よればコンテスト草創期の苦労話を次のように語られています。(注15)「そのうちに、スピーチコンテストの開催の機も熟して来たのではないかと、いうことで、大使館の0大使、館員全員と先生方や日本人会のご協力、日ブ友好協会からの賞品のご寄贈もあって、帰国までに数回コンテストが実施されました。初級・上級の2段階に分けて行われ、使用させていただいた文化・青年・スポーツ省のフロアーが一杯になるほどの盛況でした。」

いま現在もこの大会は継続されており、2001年からは日本語教育を行っている教育機関が委員を出しあい、委員会組織で大会を運営していくことになっています。

独立後、極めて短期間に日本語教育は発展して来ましたが、その背後には、戦争の時代を通じ、これまでに述べてきたような社会的な背景があったことを再度認識しなければならないと思います。

3 おわりに

以上、ブルネイにおける日本語教育の歩みについて述べました。今回、いろいろな方からお話を聞いたり、文献を読み進めて行くうちに幾いくつかの感じました。

まず、Pehin Jamil 氏の「日本は、日本人は優れた国であり人々である。それは私だけでなく多くの人が認める場所である。しかしながら、あの日本占領時代に地元のブルネイ人は本当に筆舌に尽くしがたい辛酸をなめたのである。「憲兵隊」「軍票」等忌まわしいことが実に多くあった。そのことを私の次の世代はもう知らない。あの時代に何があったのか、そ

れだけは伝えていきたいのだ。」というお言葉に接し、改めて60年も前の戦争を考えざるを得ませんでした。

このブルネイでよもやと思いましたが、ここでも「バナナ・マネー」と呼ばれた「軍票」が極めてポピュラーなものであることを知り驚きました。そして、2001年の現在でも、家にたくさん保管してある、見たければ、いくらでも見せますがという方、ある時入手して記念に持っているという方に出会いました。いずれにしても60年後の今日まで、ブルネイの各地に残っているということはかなり大量に作られたものと考えて間違いなく、それが人々に与えた落胆、失望、怒りも大きかったと想像されます。

実は、私は香港に勤務していたとき、「軍票」の歴史の生々しい現場にいました。1990年代初頭のことですが、香港の日本総領事館に多くの方が押しかけ、軍票を突きつけ日本政府にその保証を要求していた。総領事館のホールでするはずだった日本語の授業がキャンセルになったりもしました。また、「先生ならこの軍票の問題をどう考えますか」というような答えに窮する質問を、授業中こそはありませんでしたが、あちらこちらでされたことを思い出します。

また、地元ブルネイの方から「私の父の世代には片言ではあるが、日本語が聞き取れる者がいる。お前もうかつなことは話さないように注意した方がいいよ」などと冗談めいて教えてくれる人もいます。

私自身も2000年の夏にこんな経験をしました。バンドル・スリ・ブガワンの空港近くの食堂で食事をしていた時のことです。店のウエイトレスは、私が日本人であるを知って、「私は日本語はできないが、私の祖母は日本人であった。マレーシアの方からブルネイに来たそうだ。ブルネイでなくなった。」という話をされました。その時はそのままやり過ぎ何の気にもとめていなかったのですが、その「祖母」という方は御存命ならば90～100歳前後になっているはずで、矢野氏の『南進の系譜』の一節のようなことに出くわして驚いたこともあります。(注16)

まとまりのない文章になりましたが、以上報告を申し上げます。最後になりますが、こうした発表の機会を頂きましたシンポジウム委員会に対しまして御礼申し上げます。

将来多くの方にブルネイ、ボルネオ島の歴史を研究して頂きたいと考えます。そして、可能な限り日本人の足跡を留めておいて欲しいものだと思います。そこから社会と日本語教育のつながりを見つめなおしたり、今後の理想像を模索して頂きたいと思います。

小論のはじめにも申し上げましたが、これまでに日本語教育関係の情報は知られていませんでしたし、研究もあまりなされていないようです。今回このような機会に参考文献をお知らせできるだけでも嬉しいことと感じております。これまでにブルネイで日本語教育に従事されていらっしゃった諸先輩に敬意を表しますとともに、今後この道を歩かれる後輩諸氏の御健闘をお祈り致します。

今回この小論まとめるに際しまして、Pehin Jamil 氏より貴重な資料、さらに証言を頂きました。また、インタビューの際の通訳や、マレー語資料の翻訳に際しましてはブルネイ大学の佐藤宏文教授に大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

(2001年6月28日)

参考文献

- ◎ 澤田紘「ゆうゆう王国ーブルネイの歴史ー」
ブルネイ日本人会会報「ダルサラーム」2000年1月～8月号に連載
- ◎ 日本サラワク協会編 『サラワクと日本人』 1998年
- ◎ 伊藤太郎 「日本語教育草創期の思い出」『第1回 ブルネイ日本研究・日本語教育シンポジウム 報告書』2000年5月
- ◎ 斎藤正雄「ブルネイ」『2001年 海外就職 日本語を考える』
株式会社アルク 2000年
- ◎ 清水知子「日本軍占領下のシンガポール(昭南島)における日本語教育」
1994年
- ◎ 社団法人ブルネイ日本友好協会(編)
『18世紀までのブルネイの歴史と東西文化の交流』 1993年
- ◎社団法人ブルネイ日本友好協会(編)『ブルネイの戦中誌』 1995年
- ◎ 野村享 監修・野村享 根津敦 サイフル バハリ ビン アフマッド 著
『北ボルネオの歴史ー国家と歴史のはざままでー』 1997年
- ◎ 「太陽が落ちてきた日ー南方特別留学生と原始爆弾彼弾ー」
財団法人 アジア留学生協力会 ニュースレター第8号
- ◎ 越田稜 編集『アジアの教科書に書かれた日本の戦争・東南アジア編(増補版)』

(有) 梨の木舎 1990年

- ◎ 矢野暢『「南進」の系譜』 中央新書 1975年
- ◎ 斎藤正雄「香港日本語教育小史」『日本語教育ニュース 4・5号』
香港日本語教育研究会 1993年
- ◎ 斎藤正雄「インド日本語教育小史」『インド日本語教育 創刊号』
インド日本語教師会 1997年

注記

(注1) 斎藤正雄「香港日本語教育小史」

斎藤正雄「インド日本語教育小史」

(注2) 2001年5月2日、勤務先の「ブルネイ歴史センター」を訪問し、インタビューさせて頂いた。尚、Pehin Jamil 氏の経歴は以下の通り。1921年12月10日生まれ、1939年より41年まで Suitan Idris 師範学校で勉強。戦争の勃発によりブルネイへの帰国が難しくなり、シンガポールにて6か月間日本語を学ぶ。1942年ブルネイに戻り、ブルネイで更に2年間日本語を学んだ。1944年から45年にかけてクチン(マレーシア)の日本軍政府の官吏養成所にて6か月間日本語を学ぶ。

(注3) 矢野暢『「南進」の系譜』(P. 154)によれば、昭和13年当時、北ボルネオ・サラワク地域に約1500名の邦人がいたようですが、ブルネイにどれほどの邦人がいてどんな生活をしていたかは、今となっては把握するのは難しいことです。

しかし、第二時世界大戦勃発当時、地元と深く結びついた日本人もいたようです。戦争という時代背景もあり、ブルネイには土地に長く住み着きスパイ活動をしていた者もいたようです。その中でブルネイの「サトウ」、ラブアン島の「シバタ」という人物の名前が今でも土地の人の記憶に残っています。このサトウという人物は長くブルネイに住んでいたが、戦争が始まる直前に姿を消し、戦争が始まると同時に日本軍と一緒に再び姿を現したとのことです。

また、ラブアン島からブルネイに移り住んだ日本人女性のこと土地の人の記憶に残っています。その日本人婦人は後にイギリス人男性と結婚したとのことです。

(注4) 矢野暢『「南進」の系譜』、「V. 「大東亜共栄圏」の虚妄性」詳しい。

- (注5) 清水知子「日本軍占領下のシンガポール(昭南島)における日本語教育」
- (注6) 清水知子「日本軍占領下のシンガポール(昭南島)における日本語教育」
- (注7) 参考資料3を参照。
- (注8) Pehin Jamil氏によれば、日本軍は日本語の文章にスルタンの署名を強く求めたが、いくらなんでも全く意味の分からない文章に署名することもできず、ブルネイでスパイ活動をしていた「サトウ」なる人物が片言のマレー語で趣旨を伝え、スルタンの側近がそれを立派なマレー語にしてスルタン自身に伝えたとのことである。
- (注9) これに対して日本で出ている中学校や高校の歴史教科書には第2次世界大戦期はもちろん、全体を通じてもブルネイの記述はほとんど出てこない。
- (注10) 翻訳は筆者による。尚、CHAPTER4 JAPANESE OCCUPATION OF BRUNEI—JAPANESE OCCUPATION OF BRYNEI 1941—1945—の翻訳は参考資料1を参照。
- (注11) 社団法人ブルネイ日本友好協会編『ブルネイの戦中誌』
- (注12) 「太陽が落ちてきた日—南方特別留学生と原始爆弾彼弾—」に詳しい。
このニューズレターの中で、中村兵衛氏は次のように述べている。
この「南方特別留学生」の構想は、当時の政府のいわば文化工作として樹てられたもので、主管は大東亜省(南方政務局文化課)。学生の受け入れに当たった財団法人・国際学友会、その「趣旨」について、つぎのようにならうたっている。「南方処諸地域ヨリ有為ナル人物ヲ簡拔シ、我国ニ留学セシメ、可能ナル限り短期間ニ、我ガ学芸オヨビ実務ヲ習得セシムルトモニ、我ガ国民性ノ真髓ニ触レシメ、以ッテ帰国後ハ原住民ヲ率イ、大東亜共栄圏建設ニ協力邁進スベキ人材を育成スルモノトスル。」
また、本稿の最後に(参考資料4)として、ユソフ氏が昭和20年当時書いた色紙を掲載する。
- (注13) 澤田紘「ゆうゆう王国—ブルネイの歴史—」
- (注14) 国際交流基金より日本語教育専門家が派遣されその指導に当たってきた。これまでに伊藤専門家(87年~90年)、吉田専門家(90年~92年)、松井専門家(93年~95年)、荒川専門家(95年~99年)、斎藤専門家(99年~現在)が担当してきた。
また、教育省の資料によれば、受講登録者数は以下のようになっている。
1987年170名、1988年143名、1989年209名、
1990年158名、1991年341名、1992年120名、
1993年155名、1994年180名、1995年183名、
1996年166名、1997年246名、1998年151名、
1999年188名、2000年127名、2001年120名

(注15) 伊藤太郎 「日本語教育草創期の思い出」

(注16) 「矢野暢『南進』の系譜」に次のような一節があります。

(イ)

面白いことに、過去の歴史と新しい歴史が奇妙な具合に接点をもつこともあるのである。前にも引用した朝日の酒井寅吉の従軍記に、その接点が劇的なかたちでえがかれている。「ラサの町に大休止をしてゐるとき、支邦服を着た老婆がおぼつかない日本語で『兵隊さん御苦労さんで御座います』と挨拶にきた。支邦人と結婚してゐるこの老婆は思い出しては引っ張り出すように日本語をしゃべった。日本を出てから既に四十年、マレー半島の一隅に支邦人と結婚して、二十歳になる息子を育てながら生活と闘って来た愚痴話であつたが、祖国と絶縁して四十年、いまはじめて日本軍の雄々し姿を見て脈々たる祖国愛が体内に沸き返るのであつた。』『マレー戦記』177ページ」この日本人老婆は、あきらかに元からゆきさんのまたの姿である。貧しいらしく。一羽の鶏を兵隊に手渡して消えていった。南方関与の明治的様相と昭和の「南進」とが、みごとに接点をもった情景である。

(ロ)

私は東南アジアのことを研究している以上、現地での生活が長く、とくに昭和39年から2年巻、マレー半島の一イスラム村落で、調査のため村民になりきって暮らしたことはいまの私に大きな影響を与えている。当時近くの町に熊本弁をしゃべる老婆がいて、調査の合間に1、2度世間話をしに行ったことがある。そのとき、私はまだ、そのような老婆がマレー半島にいることの意味を深刻には考えていなかった。

上記(イ)の酒井寅吉の従軍記『マレー戦記』の時代は1940年ころですから、当時老婆が60～70歳とすれば、この老婆は1870年～1880年(明治時代の前半)頃の生まれと推測できます。

また、上記(ロ)の矢野暢氏がマレー半島で出会った熊本弁を話す老婆にであったのは1964年頃ですから、仮に老婆の年齢が60～70歳ぐらいとすると1894年～1904年頃(明治時代の後半)の生まれと推測できます。

そして、筆者が話しに聞いた、「祖母」という日本人老婆は何歳でいつ亡くなったかを正確に聞いた訳ではありませんが、1990年ごろ65～75歳くらいで亡くなったようですので1915～1925年ころ(大正から昭和にかけて)のお生まれであり、この地域で生き抜いた日本人が時代を越えて脈々と続いていることに驚き、記録こそ残っていないが、私が今こ

うして踏みしめているブルネイ、ボルネオの大地のあちこちにこんな歴史
があったのだらうなと思うと感動を覚えます。

(添付資料1)

ブルネイにおける中等教育段階の教科書 SECONDARY HISTORY FOR BRUNEI DARYSSALAM
CHAPTER4 JAPANESE OCCUPATION OF BRUNEI 1941—1945の翻訳

(尚、原文は英文であり、翻訳は筆者による)

*日本の侵略

日本軍は Kota Hahru に上陸した8日後にはボルネオに上陸した。それと同時に Kuala Belait を攻撃しはじめた。それは Kuala Belait が経済的に重要な地点であったからである。Kuala Belait を起点に日本軍はボルネオ島の北と南に進んだ。英国はマレー半島では若干の反撃をしたが、ブルネイではなかった。同盟軍はブルネイには戦略上の重要性はないと判断し、武装した部隊をシンガポール防衛にまわすことにした。

Kuala Belait においてイギリス政府は「石油拒絶計画」それに「石油破壊計画」という2つの作戦を遂行した。最初の段階ではヨーロッパ人やその家族の避難であり、第2段階ではセリア油田の破壊であった。

日本がボルネオを占領する以前から、調査や重要な情報を得るために、日本側のスパイが放たれていた。とりわけブルネイには多くいた。それらスパイは地元の人々の間で働き、生活をしてきた。日本の侵略に際して、それらスパイは日本軍進攻の案内役として動いたのである。

日本軍は優勢だったので、日本軍が Kuala Belait に上陸したとき、住民や国王、それにマレーの族長たちも日本軍の進攻に抵抗しないことにした。この決定を聞いた時、特に灯下管制や食料の配給命令が出された時、多くの住民はパニック状態になった。

1万人を擁する日本軍は1941年12月16日に上陸を開始した。そして、警察やセリアの油田などの重要な地点を攻略した。ブルネイにいたイギリス人、R. N. Turner は無線で首都と交信することはできなかった。敵軍侵略のニュースはセリアから駆けつけた二人の警官によってブルネイの町に伝えられた。

Kuala Belait 進攻の後、12月22日、日本軍はバンダルに移った。日本軍は一般市民のふりをしてトラックに乗ってやってきた。バンダルに着くや、警察本部や政府機関を攻撃した。イギリス人の役人は一般市民と一緒に Padang に集められた。そして、日本軍は人々に向かって「アジア人のためのアジア」というスローガンのもとにヨーロッパの支配からアジアを解放したいのだと説明をした。そして、大衆にむけ日本軍のブルネイ支配を支持してくれるよう訴えた。

ブルネイに続いて、日本軍はリンバン、イギリス領北ボルネオ、サラワクに対しても侵略を続行した。

*日本軍のブルネイ統治

ボルネオ島において、日本的な統治システムはブルネイ、ラブアン、Baram, リンバン、Bintulu, それに Lawas で取り入れられた。そして、こうしたひとまとまりの地域は「ミリ州」として知られている。「ミリ州」はサラワク、そして後にはサバをおさえていた日本の第17軍という小規模大隊によって統治された。

ところで、ブルネイでは、日本軍は破壊を免れた政府の建物を統治のためのセンターとして活用した。日本軍統治の初期にはその統治機構にわずかな変化があった。地元の間人や英国の役人達は引き続き働いていたが、それはもちろん日本軍の命令のもとにであった。マレー人の役人の中には、後に Pehin Dato Perdana Menteri Dato Laila Utama Awang Haji Ibrahim bin Mohammad Jahfar として知られる Enche Ibrahim もいた。

日本軍政下におけるブルネイでは、Sultan Ahmad Tajuddin はその恩給を停止させられた。日本軍総督により新しい統治が行なわれ、Enche Ibrahim は管理部門の長に任じられた。

地元の人々は以前と同じように働いていった。日本軍は人々の心や思いを日本の方へ引きつけようと努力していた。なぜなら土地の人々は日本に対して強い憤りを持っていたからである。特に、地元の間人は日本軍の兵士に会ったとき、おじぎをさせられていた。この日本の習慣の強制はひどいものであったし、特に占領以前からその土地に住んでいた日本人の役人から強制されることは耐えられないものであった。

日本軍がブルネイを占領していた時代、日本軍はより優れた統治制度やブルネイのインフラ再建には興味を示さなかった。日本軍の怠慢な政策により、食料、衣料品が次第に不足していくなど、広い範囲における困難が引き起こされた。

「憲兵隊」と呼ばれる日本の軍事警察の活動は人々を圧迫した。この憲兵隊は罪を犯したのではないかと容疑をかけた者に対して情け容赦ない拷問をした。あるものは憲兵隊に捕まり拷問された。ブルネイの地元の者はガドンに、ヨーロッパ人はクチンの Kampong Batu Lintang に拘留された。そうした人の中には英国人も、英国人でない人もいた。

ブルネイでは日本の統治に対して他のマレーの諸地域とは違い地下抵抗運動が何も行なわれていなかった。日本軍はちょっとでも罪を犯したり盗みをしたものは捕えたり拷問をしたりするのが常であったが、ブルネイでは抵抗運動がなかったが故にそうした拷問を受けずにすんだのである。

*NIPPONISATION

日本は土地の人々を日本の文化、言語、イデオロギーに適応させるよう最大限の努力をこらしたが、これは「NIPPONISATION」と呼ばれている。日本語は公用語となり、政府の学校の教育を通じて紹介されていた。日本は統治を人々の間に推し進めた。特に社会的、文化的な生活様式の面では日本的なやり方を広めようとさかんに努力をした。

日本は日本文化を熱心に広めようとした。しかしながらブルネイにおいてはうまくいかなかった。それというのも日本側のやり方に深い憎しみを感じていたからである。

ほかの「NIPPONISATION」としては、建物に日本の国旗である「日の丸」を強制的に掲げさせること、日本の国歌である「君が代」を強制的に学ばせられたり、尊敬させられるということがあった。そして、日本の祝日が組み込まれた日本のカレンダーが用いられた。

日本軍はまた、日本の切手やお金（「軍票」筆者注）も持ち込んだ。その初期「バナナ」紙幣と呼ばれ、それなりの価値を持っていたが、たくさん印刷され次第にその価値がなくなっていった。

教育の分野では、日本はその短い期間に日本語を地元をめざましい勢いで普及させていた。ブルネイの町では約30人の教師が3か月にわたり訓練されていた。こうした教師の中には次のような人がいた。Marsal bin Waun, Jamil bin Umar, BasirbinTaha, Tuah bin Hitam, Haji Idris bin Hamzah. こうした地元の教師のほかに Terusan, Limbang, Miri からの教師もいた。

学校における日本語教育は日本語の歌を使って教えることで学生の負担は軽くなった。日本語を学ぶことは全ての政府職員に強制されていたので、夜間の学校でまなんだ。その際、日本軍職員が指導に当たった。

日本の統治・教育は都市部ではうまくいったが、都市からはなれた田舎では教師の不足もありうまくいかなかった。しかし、3年間の日本占領時代に多くの地元住民は日本語を理解したり話すようになった。それは日本語の集中的なプログラムがあったからである。

日本の影響力を強化し、反ヨーロッパ感情を広げるために、日本は若者の交換プログラムを作った。それらのプログラムは直ちに日本の文化を広めた。このプログラムで、Sheikh Azahari はインドネシアへ、Pengiran Mohammad Yussof は日本へ、Jamil Umar, HB Hidup, Yaffendi はサラワクのミリの軍事センターへ行った。

若者の組織を作ることや文化活動は地元の人々の心をつかむために盛んに行われた。この時期に「Women's Association And the Brunei Malay Organisation」が出てきた。

*連合軍による解放

1944年11月16日、連合軍はブルネイを空爆し始めた。ブルネイトウン(バンドル セリ ベガワン) やクアラブライトは厳しい空爆にみまわれた。ブルネイ湾に停泊していた日本船は完全に破壊された。連合軍の攻撃によって日本軍は自らの立脚点であるブルネイトウンを放棄せざるをえなくなり、リンバン、カンボンキューラップへ移った。そして、ブルネイに対する統率力も弱くなった。

連合軍は1945年6月7日より作戦を開始した。2日間にわたり陸からの空爆、海からの急襲が続いた。6月10日にはLieutenant General Sir Moorshead が率いるオーストラリア軍がムアラに上陸した。オーストラリア軍は日本軍から大した抵抗を受けることもなく3日間でムアラからブルネイトウンまで軍を進めた。日本軍の多くはLimbang, Terusan, Tutong, Belait へ逃げ去った。また、あるものは生きてブルネイ川を渡れなかった。連合軍はわずかな先頭で勝利を勝ち取った。ブルネイは他の近隣諸国と同様に一時的にBritish Military Administrationの管理下におかれた。

*日本占領によりもたらされたもの

3年間にわたる日本のブルネイ占領は経済すべてと社会発展の停滞とをもたらした。特に第1次5か年計画やもとたくさんの学校を作るといったようなあ他らしい計画は進まなかった。また、人々をいなかに住ませ作物を作らせるころみもあった。食料と医薬品の不足からコレラや流行性のマラリアが発生した。

しかし、政治の分野においては日本の占領はブルネイマレーの愛国者の意識の成長をさせる基礎になった。日本が行った「Nipponise」によって地元の若い人々に与えられた機会と訓練は後に愛国の意識を持つ

人々に対してリーダーシップをとれる政治的に有能な人々を生み出した。日本の占領体制下での困難や苦痛は自らの国は自らが治めなければならないものであり、国の運命はその国の人々によって決定されなければならないという意識をブルネイにもたらした。

(添付資料2)「ゆうゆう王国—ブルネイの歴史—」の中の「日本占領期」の記述
(澤田紘著、ブルネイ日本人会会報『ダルサラーム』2000年1月～8月号に連載)

日本軍のブルネイ侵攻

賢明な白人王ヴァイナー ブルックも、日本軍の動きを見破る事ができず、日本軍による一九四一年一月二日一六日のクアラベライト、ミリへの上陸侵攻の時にはオーストラリアに出掛けており、彼を補佐するトアン ムダもまたまたロンドンに出掛けて不在でした。

一九四一年一月三日、出撃命令を受けた南方派遣軍第一八師団、第三五旅団長川口清健少将率いる歩兵第一二四連隊は、停泊していたフランス領インドシナ(ベトナム)のカムラン湾を、ボルネオ島にむけ出港しました。

風速三六メートルに達する強風波浪と、敵の潜水艦、航空機の攻撃にさらされながらブルネイのセリア、サラワクのミリに近づき、一月二日未明上陸を決行しました。

七百名の英国警察隊は油田施設、弾薬庫を爆破し敗走し、連隊はセリア、ミリを制圧しました。

セリアを制圧した日本軍は、陸路首都であるブルネイタウンの攻撃に向かい一月二日にはブルネイタウン(バンダル スリ ベガワン市)を占領、ブルネイ政府のイギリス人官僚を全員逮捕拘留しました。

一月三日、日本軍はブルネイ全土を占領、一九四二年一月二日にはサラワク、サバを含む北ボルネオ全域を占領、開戦から僅か二か月足らずの内に北ボルネオを手中にし、日本軍政下に収め、占領地に於ける支配体制を作り上げるため、四月一日ボルネオ守備軍を二千人の人員で発足させました。

四月二日、ボルネオ守備軍軍司令官となった加賀百万石の末裔前田利為中将は、立川飛行場を後にし、福岡、上海、台北、海南島、そして南方総司令部のあるサイゴンを経てボルネオ守備軍司令部のあるミリに到着、ボルネオの軍政が始まりました。前田中将は、着任すると民政移管の作業に着手、北ボルネオを東海州、西海州、ミリ州、クチン州、ポンティアナック州の五つの行政管区に分割しました。

ブルネイはミリ州に含まれ、ミリ州の州庁はブルネイタウンに置かれ州長官に児玉魯一が任命され、さらにブルネイタウンにはブルネイ県庁が置かれ県知事は木村 強、ミリ、セリア、ルトンの油田地を統括するミリ県庁は県知事に松村 存、ラブアン島のラブアン島庁には白田 傳吉が配置されました。

ブルネイサルタン オマール・タジュデンは、赴任した軍司令官前田 利為が殿様の家系であることから近親感を持ち、また日本軍が派遣した州長官、県知事も、イスラムを最大限尊重し、民心を動揺させない様に努めました、上品で従順な人柄を持つブルネイの人々は軍政に非常に協力的でした。

戦争が激しくなるにつれ、石油の需要は急激に増加してきましたが、油田のあるミリ県の海岸は遠浅で、積み出しには困難を極めて居た事と、連合軍の海空に跨がる妨害で幾度も大損害を受けていました。

軍は、水深もあり外海の高波の影響を受けないムアラに1万トン級のタンカーを横付け出来る港を建設する事にし、ミリ油田からは油送管を敷設し、ムアラから原油をタンカーで送り出しさらに、セリア、ブルネイ、ムアラを結ぶ自動車道約一二〇キロも建設すると言う構想を練り上げました、戦況の拡大に伴いこの事業が突貫工事で行われました。

この突貫工事にあたって、大勢においては軍と現地人の間には良好な協力関係が生まれ、工事は順調

に推移し終戦直前にはムアラ港から内地に向け原油が積み出されました。

ボルネオ守備軍は、将来の作戦を考え重点に飛行場を建設する命令を受け、ブルネイタウンとブルネイの海上五五キロ沖合にあるラブアン島に飛行場を建設する事が決定されました。

ラブアン飛行場建設のため、ボホート(現在のサバ州)より三百名、ブルネイより二百名の徴収使役を集められ突貫工事の重労働によって九月五日ラブアン飛行場が完成しました。

このラブアン飛行場の開場式に出席するため、クチンを出発した前田利為中将は、ビンツル沖合で墜落死し、飛行場の完成を見る事無くこの世を去りました。

前田中将の死去に伴って、ラブアン島は前田島と名を替え、山脇正隆中将がボルネオ守備軍司令官として赴任しました。

ブルネイ飛行場は広大なゴム林を伐採して建設が進められましたが、建設が進むにつれ戦況が悪化し、制空権は連合軍の手に渡りつつありました。

軍指令部は日本軍の戦闘機が撃墜され数が減り飛行場建設の意味が薄らいで来た事と、逆に連合軍に使用される事を恐れて幾度も建設命令を変更しました、が結局造りかけのブルネイ飛行場は破壊されました。

一九四三年になりボルネオ守備軍の兵力二個大隊の内さらに一個大隊が減らされ、ボルネオ守備軍は八百名となってしまいました。

すでにこの年、反日中国人アルバート クォクがアピ(コタ キナバル)に現れ、反日フィリッピン人、米軍情報部と連絡を取りながらアピ在住の中国人に対し反日工作を行っていました。

軍政時の北ボルネオの治安はボルネオ守備軍の他、憲兵隊、警察組織、自警団によっていたが、各地の行政は部族の首長達によって行われていました。

占領初期には食料難はそれほど厳しくは無く、侵攻した日本軍も予想以上に歓迎を受けたと言われていますが、日本軍による北ボルネオの占領が長引くにつれ、ミリ州を除く北ボルネオ各地では備蓄も底をつき、一九四三年には日本軍の食料徴発や無差別な略奪が始まりました、人々は日本軍に対し憎悪の目を向ける様になり、収穫された米までも徴発される様になると、住民の食料不足は深刻になり、健康状態が悪化しマラリアの流行が多く死者を出しました。

軍政部の発行したバナナマネーと呼ばれる軍票が激しいインフレによって殆ど紙屑同然となってしまい、サバを始めとする多くの占領地では、益々住民は日本軍に反感を持つようになって行き、特に日中戦争の尾を引いた中国系住民の反日感情は強く、抗日運動は日に日にその激しさを増して行きました。

一九四三年には、アメリカが支援していたフィリピンの抗日ゲリラが密かにサバに上陸し、ロバート クォクと連携し北ボルネオの抗日運動はアメリカの支援を受けながら組織化され抗日地下組織「華僑防衛組織」となりました、華僑を中心とした抗日地下組織でしたがその中には、多くのスルー族やバジャウ族も参加していました。

一九四三年十月九日遂にアピ事件と呼ばれる日本軍にとって手痛い事件が起きました。ロバート クォクを始めとするゲリラ部隊はトアランを手始めに、ムンガタル、ジュッセルトン(今のコタキナバル)と次々に警察署を襲い、五十名の日本人と現地人警察官を殺害し、ジュッセルトンを占領しました。日本軍は一旦郊外に逃れ、報復攻撃を仕掛け十月十三日ゲリラ部隊を掃討しました。この報復攻撃に、日本軍はジュッセルトンからコタバルまで空爆を行ったため、多くの民間人の家が焼かれ死傷者がでました。

日本軍のゲリラ掃討作戦は執拗に繰り返され逃げ延びて居たロバート クォクは遂に十二月十九日日本軍に逮捕され、一九四四年一月二日処刑されましたが、反日ゲリラ活動は途絶える事無く続けられました。

反面、ブルネイとミリを含むミリ州では日本軍政部とブルネイのサルタンとの協力関係が上手く行っていた事と、ブルネイ政府が開戦前から事態を想定し大量の米を備蓄していた事に加え、部隊が食料自給のために真剣に農園を開拓しさつま芋やタピオカの栽培を大規模に行っていたため食料不足が暴動反乱を呼び起こす引き金とならなかった事と、ブルネイ人自身による自警団や民兵が組織され治安が維持されていたため、記録に残される程の日本軍に対する抗日行動は起こりませんでした。

このように、軍政部と現地住民との関係が巧く行き、治安上非常に安定している事から、一九四二年六月にボルネオ軍司令部を転出させクチンに移動させていました。

石油採掘の重要拠点であるブルネイ、ミリからボルネオ守備軍のわずか二個大隊しかなかった主力部隊をこれに伴って移動させた事を考えると、ブルネイが治安上いかに安定していたかを物語っています。

一九四四年七月七日には、サンパン島の日本軍が玉砕し敗色はいよいよ深っていました。

アビ事件があつて、一九四四年九月十日ボルネオ守備軍が改組され南方総軍直轄の第三七軍通称「灘兵团」が作戦軍として組織されましたが、「灘兵团」の武器弾薬はすこぶる貧弱な装備でした。

各地の戦況は日本軍の敗北に次ぐ敗北で、一九四四年十月二二日栗田健男中将率いる第二艦隊、武蔵、大和以下四六隻の大艦隊はブルネイ泊地をレイテ沖に向け出航しました。

二日後の、二四日パラワン島沖において連合艦隊との戦闘にりましたが、この戦闘で半数以上の二四隻の戦艦を失うと言う大敗北を喫し、残りの艦隊はカムラン湾に逃げ、十一月十一日、再度ブルネイに戻って来ました。しかし連合軍はこれを発見、米軍機B24四十機、P38戦闘機一五機で攻撃を開始、栗田艦隊は連合軍の手を逃れる様にブルネイ泊地を離れましたが、その後再びボルネオにその姿を見せる事も日本に帰る事もありませんでした。

一九四五年一月十五日、ガダルカナル島で大戦最大の悲劇と言われる死闘が繰り広げられていました。

一九四五年五月二十二日、ブルネイの沖二十七キロにあるラブアン島に米軍のP38爆撃機が飛来し、ドイツ軍が全面降伏した事と連合軍が大攻勢を仕掛けて日本軍の決定的な敗北が間近い事を予告するビラを蒔いていきました。

この予告通り六月七日。重巡洋艦「ボイス」号上の連合軍第七艦隊総指揮官マッカーサー將軍は、七十隻余の艦船とジェニングス大佐指揮する五千人の海兵隊員とウッテン少将指揮する二万人のオーストラリア第九師団の将兵を率いてブルネイ沖に姿を現しました。そして、・・・・八時三五分、日本軍、連合艦隊ラブアンに接近を確認。艦船十二隻を発見。十二時二十分、連合軍艦隊艦船五二隻を確認十二時三十分 連合軍艦隊艦船六七隻を確認十四時00分 連合軍艦隊、ムアラ、ラブアン島に向け艦砲射撃を開始。

二日間に亘る猛烈な艦砲射撃の後、六月十日マッカーサー將軍は、ラブアン島に米海兵隊五千人の将兵の上陸を開始しました。

艦砲の掩護とP38爆撃機数十機の掩護を受けながら、埠頭に到着した舟艇からM型戦車を先頭に続々と将兵が上陸を開始しました。

これを迎え撃つのは、ラブアン守備の独立歩兵大隊第三七一大隊約五百名の将兵でした。肉薄する米軍のM型戦車をタコ壺で待ち受ける日本兵には、攻撃用爆雷の他には丘の上に備えた二挺の九九式軽機関銃

と兵士の持つ小銃五百挺と手榴弾が全ての兵器でした。

眼前に迫った、圧倒的な物量と火器、圧倒的な兵力を持つ連合軍に、勝つ可能性など絶無で、玉砕の道しか残されていない事を、誰よりも知り得たのがタコ壺の中で息を潜める日本兵でした。

どれだけの損害を敵に与えられるかだけが彼らに残された唯一の道でした。

タコ壺から躍り出た二十才過ぎの若い下士官は日本刀を抜き、手榴弾を眼前の歩兵群に投げ込みました、ばたばたと倒れる米海兵隊員、爆雷を踏み轟音をたてて頓挫する戦車、上陸部隊は一目散に後退を始めました。

しかし束の間、後続の戦車群が続々と前面に沸き上がると、一斉に迫撃砲が火を吹きました、砲弾が降り注がれ硝煙の中に日本兵はつぎつぎと傷つき倒れていきました。

手を、足を、砲弾の破片、小銃の弾で撃ち抜かれ、血みどろになりながら後退する十数名の日本兵の前に、自動小銃を構えた数百名の米兵が立ちふさがりました、「突喚・・・」日本兵が斬り込みました、自動小銃が火を吹き全ての命を奪いました。

炎熱のラブアン島のいたる所で、こうした斬り込みが繰り返され、二十六日、最後の斬り込みが敢行され、残されたわずか五名の兵士は湿地帯に潜みグリラ戦を繰り返し、ラブアン島守備軍は終戦の十日前昭和四十五年八月五日玉砕しました。

六月十日朝、ラブアン島攻撃に勢いを得た連合軍の攻撃はブルネイに向けられました、迎え撃つ日本軍はブルネイ地区守備隊貫兵団の筒井三六七大隊、佐藤三六六大隊の一千人余でした。

マッカーサー将軍はムアラ上陸地点とし、猛烈な艦砲射撃と空爆をしかけ、豪州軍第九師団二万人の上陸を開始しました。

ムアラ地区守備隊、貫兵団佐藤大隊の五百名の将兵はこれを迎え撃ち、戦闘を仕掛けましたが、圧倒的な兵力の前に瞬時の内に玉砕しました。

ムアラに上陸した豪州軍は迫撃砲を先頭に、日本軍が創ったコタバトウを通る自動車道を途中幾度も日本軍と激しい戦闘を繰り返し、多くのブルネイ市民を巻き添で死傷させ、じりじりとブルネイタウン近づきました。

六月十二日午前、ブルネイ市内に艦砲射撃の至近弾が打ち込まれ、P38爆撃機が激しく機銃掃射を繰り返しました。

ブルネイ地区守備隊は、圧倒的な連合軍の兵力と装備の前になす術がありませんでした、ついに日本軍にリンバンへの転進命令が下されました。

十二日夜、密かにブルネイ河にマレー人がこぐ数隻の小舟が用意されました、小舟を用意したマレー人は軍政庁に勤めていたオフィサー達でした、多くの一般市民はすでに戦場と化したブルネイタウンから疎開して殆ど見かける事は有りませんでした、熊野周二ミリ州長官を始めとする軍政要員、一般邦人の数百名は持てるだけの食料を携えブルネイ河畔に集結しました。

子供、婦人、一般邦人がまず小舟に乗り込み静かに小舟が漕ぎ出されました。不思議に、砲撃も空爆もぴたりと止み、照明弾だけが明るくブルネイ河を照らし出し、小舟は幾度も川面に見え隠れしながら対岸にたどり着きました。

最後の日本軍兵士が対岸に渡り終えても、この不思議な光景は続きました。まるで、敗走する日本人達

を無事に対岸に送り届ける様に照明弾だけが打ち出され川面を照らし続けていました。

対岸にたどり着き振り返ると、今小舟に乗り込んだ埠頭にブルネイの人達が幾人もいつまでも手を振っていました、後ろにはブルネイの町が舞台の町並みの様に静かに明るく照らし出されていました、涙がとめども無く溢れ、その光景を滲ませました、絶叫する「さようなら」がさらに涙をあふれさせました。

「さようなら」が嗚咽に変わり、人々は闇のジャングルの中に吸い込まれる様に、飢えと疲労と失望と恐怖の死の敗走に旅立ちました。

こうして、日本軍の無条件降伏を待たずにブルネイを始めとする北ボルネオの軍政は終わりを告げました

(以上)

(添付資料3) 1941年当時のブルネイ地図

(添付資料4) ユソフ氏の色紙